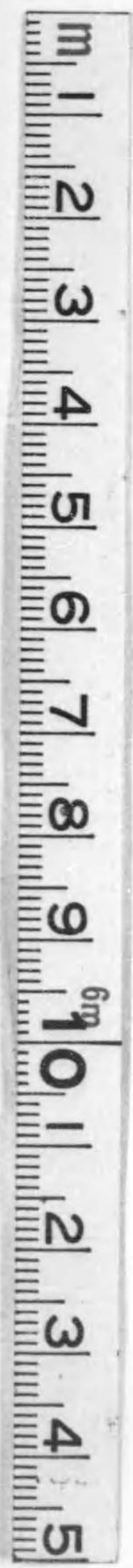




325
511



始



87 111

21122

325-511



著光淚井荒
料資啟布
三十佛講話

錄 附
來由神善六十

大正
6. 7. 2
內交

自序

十三佛は我が國の民間に於て、最も通俗に信仰されて居るのであるが、然も其の組織や由來等を知つて居る者は甚だ稀である。これ或は十三佛は密教所説の曼荼羅であるから、古來所謂眞言秘密の雲に鎖されて、これを説明して世に公にしたものが多く無いからであらうか。これが一般に信仰せられて居る丈け、それ丈け甚だ遺憾に堪へざる次第である。

乃で十三佛曼荼羅が、密教最後の發達を示す深意秘義は暫く措き、一般信者の爲めに、十三佛曼荼羅とは如

二
何なるものか、其の組織系統や、又不動明王とは如何なる佛か、地藏菩薩とは何ういふ方かといふ事に就て其誓願功德等を極めて通俗平易を旨とし、昔話などを引用して、婦女老幼にも解し易く、説明したのが本書である。

讀者幸に之に依つて、十三佛の大要を知り、信仰の一助となし、又一々の佛菩薩の誓願功德等を深く味うて、日常反省の資料ともなし、以て向上修養の手引ともなすことを得るならば、予が満足とする所である。

附録十六善神由來は、これ亦例に依りて通俗平易を

旨とし、其の名義體相及び起原の大要を述べ、誓願功德并に大般若經の要旨祈禱の眞意義等に就て、實例因縁等を引用し、何人にも容易に了解し得るやうに述べたるもの。以て大般若法要等の布教の参考ともなり、又家庭修養の資料ともならば幸甚の至りである。

大正六年四月釋尊降誕の日

涙 光 識

君よきけ佛の説きし法はたい
世をおさむるのでだてなりけり
(夢想國師)

見ぬ昔なるは佛の身なりけり
その身は人のこゝろにぞ住む
(慈鎮和尚)

言のやも及ばぬ法の道芝を
こゝろの外は誰にとはまし
(頓阿法師)

布教資料 十三佛講話 (目次)

第一章 總説

- 第一 緒言.....一
- 第二 十三佛の由來.....四
- 第三 十三佛曼荼羅.....九

第二章 十三佛各説

- 第一 不動明王.....一五
- 第二 釋迦如來.....二七
- 第三 文殊菩薩.....三三
- 第四 普賢菩薩.....四〇
- 第五 地藏菩薩.....四六
- 第六 彌勒菩薩.....五九
- 第七 藥師如來.....六三

目次

第八章 觀音菩薩……………七〇

第九章 勢至菩薩……………八〇

第十章 阿彌陀如來……………八七

第十一章 阿閼如來……………九五

第十二章 大日如來……………一〇一

第十三章 虛空藏菩薩……………一〇八

第三章 結 辭……………一二四

(附錄) 十三佛真言……………一二〇

十六善神由來

第一章 緒言……………一二一

第二章 十六善神の名義と體相……………一二五

第三章 十六善神の起原……………一二九

第四章 十六善神と大般若經……………一三四

第五章 十六善神の誓願功德……………一五〇

第六章 釋尊及び四菩薩……………一六三

第七章 玄奘三藏……………一六六

第八章 塵沙大王……………一八〇

第九章 大般若の功德……………一九一

第十章 祈禱の眞意義……………二〇一

目次終

目次

信心は法を聴くを因とし、
 法を聴くは信心を印とす。
 (涅槃經)
 信は道の元と爲す功德の母なり、
 一切諸の善法を長養す。
 (華嚴經)

資料 佛教 十三佛講話

荒井 涙光 著



第一章 總說

第一 緒言

十三佛は古來佛教信者として誰れ知らぬもの無きまでに最も普遍的に最も通俗的に信仰の對象とせられ誰れでも一口に十三佛といへば、ウムあれかど首肯く如く佛教の各宗を通じて、廣く知られて居るのである。而して殊に新亡者のあつた時には、初七日より二十三回忌までの一々に配して、追福の守本尊として尊崇せられて居る。かくも廣

く通俗に信仰せられて居る處の十三佛でありながら、其の由來解説等はこれを知るものが甚だ稀れである。一口に十三佛といふのは誰れでも知るが、さて其の十三佛とはと尋ねると、甚しきは一々の名稱をもよく記憶して居らぬものさへある。況んや其の由來解説や、各佛の誓願功德に於てをやで、十三佛が最も通俗に信仰せられ居る丈、それだけ甚だ遺憾に思ふ所である。併しこれが通常世間の人に知られないといふのは、大いに理由のあることで、元來此の十三佛は、眞言密教の説から出たもので、胎藏界十三大院に慣うて、虚空藏菩薩を主尊として、これに十二佛を屬せしめて組織した所の一曼荼羅であつて、これが即ち十三佛曼荼羅である。此の十三佛曼荼羅は、實に密教最後の發達を表したもので、眞言密教の深意秘義の宿る所で、古來所謂眞言秘密の雲に深く鎖されて、公に説明講解せられたものが、無かつたからである。

否な全く無い譯では無いが、僅かに『十三佛抄』『十三佛由來』及び『十三佛講話』等の二三に過ぎずして、中に就て『十三佛講話』が獨り組織的系統的に十三佛曼荼羅を説明し、又各佛に就いても解し易く説明せられてあるだけで、他は單に一々の佛菩薩を區々に説明し、或は六ヶしい經文や眞言を其まゝ掲げてあつて、到ても一般通俗に誰でも解し易いといふ譯には行かぬ。加ふるに古來所謂靈驗記或は感應記の如きにある所の、今日の常識では到ても考へられぬやうな靈驗利益を列擧してあるに過ぎぬのである。故に今十三佛の話をするに當つて、これ等數書を參酌し、敢て眞言密教一派の専門的に亘らず、一般信者の爲めに勉めて通俗を旨として、今日一般に行はれて居る十三佛曼荼羅に就いて、誰れ人にも解し易く其の概説を試み、且つ各佛の一々に就て、誓願功德等を述べやうと思ふのである。

第二 十三佛の由來

十三佛とは、一に不動明王、二に釋迦如來、三に文珠菩薩、四に普賢菩薩、五に地藏菩薩、六に彌勒菩薩、七に藥師如來、八に觀音菩薩、九に勢至菩薩、十に阿彌陀如來、十一に阿閼如來、十二に大日如來、十三に虛空藏菩薩で、此の中不動明王と大日如來と虛空藏菩薩との三が純密教の佛である。さて此十三と數を限つたのは何故であるかといふに其の典據は不明である。佛教八萬四千の法門五千餘卷の經文中、一も佛說十三佛經などいふものもなければ、十三佛の名號を列へ上げてある所もない。乃でいろ／＼の説をなす者があつて、中にはこれは梅尾の明惠上人が夢中に十三佛が雲に乗つて來り給ふを感得せられ、これを繪畫にして記つたものであるといひ、或は其の源は十王經の説に依て、十王の本地佛

たる十佛に後の三佛を加へたものといふ。十王は亡者が中有として生有と死有との間に在つて、また次ぎの生處が定らず、フワ／＼して居るうちに、閻魔の廳十ヶ所に於て、生前の罪業の裁判を受け、其輕重に依つて次ぎの生を定め送られるのであるから、十三佛を供養すれば、十三佛は即ち十王の本地佛であるから、假りに猛惡忿怒の相を現はして亡者を威赫して居たものが、忽ち本心の慈悲柔和の尊影を現はし、哀愍の手を垂れて、サア來い來いと極樂淨土へ導くのである。故に親を送つた孝子や、子に先立たれた慈父、悲母は、十三佛を供養して七日々々を始めとし、忌日命日の追善を懇ろに營むが肝要であるなど、まことしやかに喋々して居るものもある。今日でも追善供養に十三佛の掛軸をかけたりなどして祀るのは、大方此意味であるかも知れぬが、餘りアテにはならぬ。

明惠上人の夢中感得説は固より好事家が偶然に深秘の説を附會したものであらうか。明惠上人の感得説を證據立てる爲めに十王經を引き出したものであるか、十王經の説に依つて明惠上人の感得を附會したもので、其の何れが先きであるか、不明である。尤も何れが先きでも後でも一向差支はないが、兎に角此の二説は密接の關係があるのであらうけれども、チト感心の出来ぬ説である。殊に十王經の説の如きは、何故に十佛に三佛を加へて十三佛としたのであらうか、五佛七佛を加へても差支ないではないか。寧ろ三佛を加へずに十佛としてあれば聊か肯ふことも出来るが、特に三佛だけを加へたのは如何にも妙であるではないか。或は亡者追福の忌日たる初七日より二十三日忌までの忌日の數に當て鉄めたのであらうか、それならば七七日忌の次ぎに百ヶ日

忌があるから十四佛なければならぬ都合になる。兎にも角にも受取難い説である。

次に十三佛は、慈覺大師が密教の根本原理に依て、娑婆に最も因縁の深い佛を一曼荼羅に網羅して、流布せしめたものであるとの説もあるが、これは一應其意を得て居るやうであるけれども、歴史的に觀察すると時代の相違があるから、再應不確な説である。富田師は講話の中に否認の意をもらして居る。

又満米上人が冥途に行つた時十三佛が亡者を救ふのを見て、これを繪畫にしたものであるといひ、或は立川流の大成者たる東寺長者の弘真房文觀上人が、其頃盛んに世上に崇敬せられてあつた諸佛を集めて十三佛曼荼羅を作つたものであるといふ説もあるが、前者は餘りに無稽なこと取るに足らず、後者は明惠上人のそれと大同少異の説であ

る。

以上の五説はそれ／＼多少の根據が無いでもあるまい、往昔人智の未だ開けざる時代に於て頑冥の田夫野人を教化するには、それでも世人を首肯せしめ得たかも知れぬが、今日こんな説明では一人として成程と感服し信仰するものはあるまい。然らば此十三佛の根據は何處にあるか佛名を特に十三に限つたのは何故か、且つ十三佛曼荼羅には比較的世人に信奉せられない虚空藏菩薩を主尊として、釋迦佛阿彌陀如來、大日如來等の如きより多く世人に尊信せられ廣大圓滿の徳を具へて居ると思惟せられて居るものを主尊としないのであるかといふに、これを密教の根本原理から割り出したので、これを詳しく説明すれば、自ら眞言秘密の教法も判明し、金胎兩部曼荼羅の祕法も會得するところが出来るのであるが、それには勢ひ専門的になつて事が六ヶしくな

り、到底一朝一夕に説き盡すことが出来ぬから、今はたゞ單に十三佛曼荼羅の根據を明かし、其所以を左に略述するに止めて置く。

第三 十三佛曼荼羅

抑々十三佛曼荼羅は密教の根本曼荼羅たる胎藏界曼荼羅の十三大院に象つて組織せられたもので、其十三なる佛名は實に十三大院に排列したのである。而して虚空藏菩薩を主尊としたのは、虚空藏菩薩は密教唯一の最尊最貴なる如意寶珠を最も現實的に人格化したものであるからである。元來密教は極端な象徴主義で支那に於て不空三藏の識見に依て金剛界胎藏界兩部不二の深旨を發揮し、弘法大師に至つて、最もこれを組織的に系統的に二段の發達をなして、不二の深旨を象徴すべき何物かの必要を來たしたので、これを如意寶珠としたのである。

る。されば如意寶珠は實に密教の最極最秘の深意を表したもので、所謂密教の理想を現實的に示したものである。而して虚空藏菩薩はこれを人格化して、人世理想の本尊佛としたのである。

胎藏曼荼羅といふのは、極端なる包容主義に依つて成立したもので、他宗他派の善神は勿論、悪神鬼神をも悉く佛の等位とし、大日如來の變化影像としたのである。而して大日如來とは宇宙を人格化したものであるから、決してこれを遠きに求むべきではなく、人々自己本地の風光が取りも直さず大日如來であるといふのである。元來曼荼羅とは梵語で譯して輪圓具足といふ、輪圓とは圓滿無缺の義で具足とは具備充足即ち物の備はつて居るといふ意味であるから、全宇宙の凡ての事物が圓滿具備せられて居るといふ義に依て曼荼羅といふのである。而してこれを物質的平等觀から觀察する場合には胎藏界十三大院曼

荼羅と稱し、精神的差別觀から思索する場合には金剛界九會曼荼羅と稱するのが密教の所説である。然るに此物質と精神差別と平等とは不一不異で、譬へば一枚の紙に表裏のあるが如きものである。故に此の不二の理を現はさんが爲めに、これを人格化したる虚空藏菩薩を中心として十三佛曼荼羅なるものを組織したのである。而して此曼荼羅中に網羅せられた佛名は、最も通俗に崇拜せらるゝものを採つたものであらうが、これとても無意味にたい集めたのではなく、暫く無淺深の諸佛菩薩に淺深差別して、發心修行菩提涅槃の順序を示したものである。即ち第一不動明王は發心で第二釋迦如來より第十一阿閼如來までの十佛は、十地十波羅密的修行、第十二の大日如來が菩提、第十三の虚空藏菩薩が最極究竟の涅槃と組織的に排列したので、今日一般に行はれて居る十三佛の掛軸に不動明王が一番下位にあつて虚空藏菩薩

が最上位にあるのは即ち此意に依つて畫いたものである。是は一應差別門から縦に眺めたのであるが平等門から横に眺むれば決して不動明王が淺略で、大日如來が深祕といふ譯では決してなく、一佛一尊の間に毫厘も差別懸隔あることなく、其の誓願利益に上下甲乙のあるのではない。故に古い十三佛曼荼羅には、此理を示して圖の如く虚空藏菩薩を中心として他の十二佛を其周圍に圍繞せしめて畫いたものもあるのである。

左圖に依つて見れば、不動明王以下大日如來に至る十二佛は、一虚空藏菩薩の分身のやうなもので、十三佛即虚空藏菩薩、虚空藏菩薩即十三佛と見るべく、暫く開合の別あるのみで、これは密教の立脚地から、金胎兩部不二の妙理を明す爲めに、虚空藏菩薩を中心として他の十二佛を屬類としたまでのことで、若し觀音を中心とし又阿彌陀を中心として



も更に差支はないのであるけれども、十三佛曼荼羅は元來密教曼荼羅の最後の發達を現はしたもので、特に虚空藏菩薩を中心としたのは、密教の特色であるので、之を胎藏曼荼羅の虚空藏院の順に排列すると圖のやうな唯だ密教中の佛である所の不動、大日、虚空藏の三佛が大きな形になるので、こゝに密

教の深意が存するのであるさうである。斯くの如く十三佛曼荼羅は密教の最極祕法を網羅し、甚深の妙理を

不動明王	阿闍如來	阿彌陀如來	勢至菩薩	觀音菩薩	藥師如來	虛空藏菩薩	釋迦如來	文珠菩薩	普賢菩薩	地藏菩薩	彌勒菩薩	大日如來
------	------	-------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------

表示したものであるから、此組織系統を詳かに述べれば、勢ひ専門的になつて、多少密教の知識がなくては了解に困難であるから最も通俗に大體十三佛曼荼羅とは斯様なものであるといふ一通りの話だけに止めて、以下順を逐うて各佛の説明に移ることにする。

第二章 十三佛各説

十三佛の各佛に就いて説明するにも、一々専門的に述べるとしては、僅かに一佛を解説するのも容易な業ではなく、且つかゝる小冊子に於ては、到底不可

能の事であるから、矢張り大體に於て不動明王とは如何なる誓願利益があるものか、觀世音菩薩とは如何なるものかといふことを、普通一般の人が誰でも知つて置く必要がある位の程度に止めて置くことにする。

第一 不動明王

不動明王は、胎藏界曼荼羅の持明院に住する佛で、如來の教令輪身として、折伏を表示せるのである。元來不動尊の名義には、一に常住金剛即ち吾人が本來具有して居る所の菩提心を常住堅固なること、金剛の如く加護し玉ふの意。二に聖無動即ち衆生が煩惱雜染の生死海中に日夜慳貪邪見の淺ましい相をして居るものを、其まゝ諸佛諸尊と同位に見て加護し玉ふの意。三に風動即ち衆生の出身入息變遷轉移窮りな

きを加護し玉ふ意。四に風童即ち已成の佛でありながら衆生濟度の爲めに特に奴僕童子の相を現して加護し玉ふ意。五に不動即ち四魔を降伏して寂靜不動の意の五義があるのであるが今は第五の義に依て不動と稱するのである。さりながら前の四義を全く無視して言ふのでないことは勿論で今不動といふ其中に自ら第一第二第三第四の義をも含んで居るのである。故に五即ち一、一即ち五、開けば五となり、收むれば一となる今は暫く一を擧げて四を攝し、以て單に不動明王と稱するに外ならぬ。

抑々佛教には攝受門と折伏門との二があつて前者は大慈大悲の大風呂敷に何でも彼でも受け入れて哀愍擁護し、後者は反逆する者を飽まで折伏して服従せしむるのである。此二門は全く相反するの觀あるも等しく佛陀大悲の方便に外ならぬので彼の古歌に

父はうつ母は抱きて悲しむを

かほる心と子は思ふらん

とある如く、打つも悲しむも子を愛する親の心に寸毫も變りはないと同じであるのであることは言ふまでもない。所で今この不動明王は、折伏門の佛で、如來の教令輪身即ち如來の教訓命令を衆生に傳へて厭やでも應でも飽までそれに従ひ服せしめねば已まぬといふ重い役目を持つて居るのである。故に其の内心には慈悲忍辱の柔しい懐しい姿をして教化するのが本意であるけれども、それでは其の姿に慣れて、服従しないものがある。強剛難化とて所謂酢でも昆蟲でも行かぬといふやうなものが往々あるが、それ等をも打ち捨て、置く譯には行かぬ如何なるものでも濟度せずには置かれぬといふ大慈大悲より、更に強剛難化の衆生に接するので、時には打ち懲らし捕縛してまでも佛の

命令に従はせる若し愈々聽かないで抵抗するものがあれば、時と場合によつては、斬り殺しても従へるといふ所から、猛悪忿怒の相を表はして居るのである。

されば不動明王の形は、繪でも彫刻でも、色白の優男といふやうなことはない。随分種々の異つた像もあるけれども、ドレもコレも皆な色は眞ッ黒で、齒を剃き出して見るからに、凄い御影をしてござる。世間で、色の黒い醜男子を目して「アレは不動様のやうだ」と言ふ、以て不動明王が如何にマヅイ恐ろしい御様子であるかを察せられるではないか。斯様に醜い恐ろしい御影を示されるのも、偏へに衆生濟度の大悲願よりのことであると聞いては、只だ有がたさに涙こぼるゝの外は無いではないか。乃で此の尊像に就て少しく説明して見るならば、不動明王は何れも色は黒く、右の手に鋭き利劍を持ち、左の手に堅固なる繩を持

つて背に焔々たる火炎を負ひ、大磐石の上に巖然として坐つてござる、これが不動明王の本法で、これぞ悪人を懲らしめる形である。

さてこの色の黒いのは何を表示したものでかといへば、衆生が無始以來無明煩惱に、果てしなき苦を重ねて居る、それを不動明王の大威力に依つて碎破し、救済するの徳を現したものである。次に利劍を持つて居られるのは、劍は物を裁断するの徳を具へて居るから、貪瞋痴慢疑等の煩惱を断ち切るの徳。繩は邪見放逸の衆生を、フン縛つて引きづつてまでも正道に就かしめんとする大悲。背の焔々たる猛火は、火は能く物を焼き拂ふの徳を備へて居るものであるから、衆生の雜染煩惱の邪魔物を一切焼き拂うて、身心共に安穩悦樂を得せしめ玉ふ徳。而して大磐石の上に坐して居るのは、衆生の業障煩惱は重きこと磐石の如くであるから、それをしつかり踏みしめて起らしめないやうにせらるゝのである。

る。尙ほ額の皺は生死海中の水波を表し、衆生が生死海中に流轉苦患の有様を感み濟ふの相を示し又上下の齒を噛み違ひて居られるのは、上求菩提下化衆生とて、下の齒が上に向ひて居るのは、上に向つて菩提を求め上の齒が下に向いて居るのは、下界に向つて衆生を化度するの義を示し、而も此の上下の齒が噛み違ひて居るのは、迷悟不二生佛一如を示したものである。

併しこれは一通りの解釋で前に述べた如く、繩でフン縛るの劍で斬り殺すのと如何にも恐しいやうであり、實際其御影がかうして恐ろしい忿怒の相を現はして居られるが、これも大慈大悲の一面で、親が子に對する愛情に就て考へても大方は察せられる。不動明王は一寸見ればこそ實に恐ろしい姿、怖い形をして居られるが其の内心を深く伺へば、諸佛中最も深き大悲を懷いて居られるのである。それは此の明王が

奴僕の相を現じて居られるのに知るべきである。古來印度の風俗では、髪を左に垂れて結ぶのを奴僕の印としたのであるが、不動明王の頭の毛は矢張り左に垂れて結んであるのだ、これぞ不動明王が信仰する者の爲めに、奴僕となつて迷ひの此の岸より悟の彼の岸に運ぶとの誓願を顯したものである。故に多くの諸佛は皆な蓮華座に坐して居るのに、獨り不動明王は大磐石の上に坐して、寧ろ蓮華座を頂上に戴いて居る、これは何の爲めかといふに、自ら衆生の奴僕となり、衆生を頂上の蓮華座に戴せて生死の苦海を渡すが爲めなのである。

とかけ喰ふかやあのほどゝぎす

人は見かけによらぬもの

といふ俗語がある如く、世の中には見かけは柔しい顔つきをして居て、随分恐ろしい罪惡を犯すものもあるのに、不動明王はアノ恐ろしい姿

形の見かけによらず、柔和忍辱の大慈大悲の廣大なること、奴僕の三昧に住して如何なるものでも濟度せざれば止めぬとの誓願は實に感ぜざるを得ないではないか。下總成田の不動明王を初めとして、到る所諸方に不動明王の信仰が盛んなるのも、亦所以ある哉である、尙ほ此の不動明王に就て忘れてはならぬことは、大磐石の上に坐し玉ふことである。これは前にもいふた如く、一應の解釋は、衆生の重い業障煩惱をふみ占めて居るのであるが、更に又其の御名の泰然不動を示したものである。内に確固不動の精神を懐き、外に卑しき奴僕の相を現して衆生を化度せらるゝ大功德は實に尊重讃歎すべきではないか。殊に十三佛の配當より見れば、不動明王が第一であるから、これ發心即ち立志に相當する位置である。古人も

初發心時便成正覺

といひ、又

發心正しからざれば萬行虚しく施す

と言はれてあつて、凡そ事を爲すに當つては、最初の發心が一番大切である。發心の如何に依つて、事の成ると成らざるとは決するのである。故に吾人は此の不動明王の確固不動の精神を修養することを忘れてはならぬ、不動明王を信するにしても、徒らに明王を客觀にのみ求めず、自己これ不動明王の三昧に住する信念がなくてはならぬ。或人が嘗て二宮尊徳翁の居室に不動明王の畫幅を掲げあるを見て、翁も亦此尊に祈願して幸福を求めんとせらるか、と問ふと翁は「否や、予は壯年の時小田原侯の命を受けて、野州の物井に來たが、人民離散し土地荒廢して如何ともすることが出来なかつた。故に功の成否に關せず、一生此所を動くまいと決心した。例へ事故が出来ても背に火が燃え付いても、

決して動かないと死を以て誓つたのだ。然るに不動尊は動かざれば尊しと訓するから、予は其名義と猛火背に燃え付くも動かぬ像形とを信じ、これを掛けて其意を妻子に示すので、不動佛に何の功驗あるか知らねど、予が今日に至つたのは、全く不動心の堅固一つであるから、今日も尙ほ之れを掛けて、我が動搖し易き心の戒めとなし、朝夕反省するのである。」と答へたとのことであるが、實にこれでなくてはならぬ。

蜀山人が或時目黒の不動様へ參詣して、門前の田樂屋で一杯傾けて居ると、其處に一人の武士が矢張りチビリチビリと一酌を傾けて居たが、早く田樂を持つて來い、といふたので、店の婆さん大急ぎで生焼の田樂を出した。スルト武士は、こんな生焼けが食へるか、モット能く焼いて來い。」と怒鳴りつけたので、婆さんビツクリ、周章で今度は黒焦げに焼いて出したからたまらない、武士はクソツツと怒り、黒焦げの田樂が食

はれるか、と聊か酔が廻つて居る所だから、恰かも不動様のやうな形相すさまじく、許しは置かぬぞ、と腰の物に手をかけんとする勢。これを此方に眺めて居た蜀山人は、「ハハアこれは面白い、と腹の中直ぐに

こんがら鈴迦羅と焼けばよいのにせいたか(制多迦)ら中にふどう(不動)もありさうなもの

と咏んだので、流石の武士も、「アツハツハハア」と大笑ひ、婆さんもホツと安心してニッコリしたとか。苟くも武士たる者が、田樂の焼き加減位で腹を立て、腰の物にまで手をかけるといふ大人氣ない振舞に及ては、自分は武士なりといふ確固不動の精神が無いからのこと、又婆さんが、少し位急かれたとか小言をいはれたとかで、商賣の田樂を焼き損ふとは、これも精神がフラクして居る證據で褒めた話では無い。然るにこれを肴にして狂歌を一首咏んだ蜀山人は、自己の風流三昧に確固不

動の精神があるから、當意即妙の歌も咏めたのであらう。

伊達政宗が幼き折りに、侍臣に連れられて不動明王に參詣したことがある。時に政宗は、不動明王が外の佛とは様子が見え、火炎の中に凄じい相をして立つて居られるのを見て、奇異の感を懐き、其の理由を侍臣に尋ねた。スルト侍臣が答へて、不動明王は、内に慈悲を貯へて面に折伏忿怒の相を示し、服従し難き剛強の衆生を服従し濟度なさるので、其の慈悲の廣大なることは彼柔和顔をしてござる觀音菩薩や地藏菩薩と少しも變りは無いのである。と言ふと、政宗は「フツム」と感心し、「これぞ武將の心掛くべきことである、内に慈悲の念が無かつたならば人は親しむまい、而して面に威光がなければ人を服従させることは出来ぬ。不動明王こそ實に我等の學ぶべきものである。」といふたのとことであるが、蓋し武士道の本義も實にこゝにあるのである。否な、豈に

獨り武士道のみならんやである。

第二 釋迦如來

釋迦如來は印度に降誕せられた釋迦如來で、因果經等の説に依ると、釋迦如來の前身は善白と名け、一生補處の菩薩として兜率天に在つて説法教化して居られたが、娑婆の衆生濟度の因縁が熟したので、此世に出現せられたのであるとのことである。釋迦如來の降誕年代に就ては異説が四五十種もあるとのことだが、最近の説として真に近いだらうといふのが、西曆紀元前四百七十九年で、今から約二千四百餘年前である。併し我が國古來の説では支那周の昭王二十六年四月八日といふので、西曆紀元前一千〇二十八年、神武天皇即位紀元前三百六十八年、即ち今より二千九百四十餘年前といふので、一口に三千年の昔といふ

て居る。斯様に古來の説と最近の説とでは五百年以上の差があるの
であるが、今は歴史の研究ではないのであるから、詳しい説明は措いて、
兎に角今より二千九百餘年前乃至二千四百餘年前に、中印度迦毘羅城
の太子として降誕せられ、御父は淨飯大王、御母は摩耶夫人といふこと
は世人の等しく知る所である。

頃しも四月八日、御母摩耶夫人は、花咲き匂ふ藍毘尼園を逍遙し、無憂
樹の下に到りて、玉臂を延ばし、一枝の花を手折らうとし、玉ふや、忽然と
して王子御誕生、直ちに自ら七歩して、一指は天を指し、一指は地を指し
て、天上天下唯我獨尊と仰せられた。父母の御喜びは喩ふるに物なく、
御名を悉達多と名け御寵愛せられた。悉達多とは一切成就の義であ
る。然るに御誕生後七日目に御母は此の世を去られたので、其妹君波
闍波提夫人が専ら保育の任に當られた。

かくて十七才にして、善覺王の女耶輸陀羅姫を納れて妃となし、一子
羅睺羅を擧げさせ玉ひ、廿九才十二月八日の夜、密かに城を忍び出で、一
國の富も王候の位も蔽履の如く捨て、斷ち難き恩愛の情を斷つて出家
求道の人となられ、先づ有名なる跋迦仙人を訪ひ、次いで阿羅邏迦闍を
訪ひ、又鬱陀羅摩を尋ね、從うて修行し玉ふたが、遂に満足すること能は
ず、自ら思惟すらく、道は他に依て求むべきではない、自ら修行して證す
べきである、乃ち尼連禪河のほとりなる林中に入つて、苦行を修し、體
思を凝らさるゝこと六年の長きに及んだが、徒らに身體が疲勞する計
りで、更らに得る所がなかつた。
是に於て又謂ひらく、道は慧解に依て成じ、慧解は根に依て成じ、根は
飲食に依て補はるゝものである、然るに飲食を斷つのは道を得るの因
ではない、依て食を受けて道を成すべきである。」とお考ひになつて、尼

連禪河に浴して身を清め、牧女難陀の供養を受けて乳糜を食し、身體氣力を恢復して佛陀伽耶に赴き、菩提樹の下に淨く軟かなる草を敷いて結跏趺坐し

我れ正覺を成せずんば此座を起たじ。

と誓ひ、端坐冥想に全力を注いで工夫せられた。時に心身内外の誘惑は幾度か太子の決心を覆さんと試みたが、奮然靜思遂に諸魔を降服して、御齡三十五才の十二月八日曉天、璨として輝く明星を一見して忽ち智見開發し、無上の眞理を覺得して、求道の目的を達せられ、佛陀覺者となられたのである。

我と大地有情と同時に成道す、

とは實に此時の大獅子吼で、爾來幾多の横説縦説、四十五年の教誨、三百餘會の説法も、此の理を示し、此の意を説かれたに外ならぬので、八萬四

千の法門、五千餘卷の經文と數あるけれども、佛敎の大本は詮じつめれば此の一句に歸するのである。併し一口に斯う言うて了へば何でもないやうなものの、眞實に此の意を體認するには容易ならぬことで、所謂修せざるには顯はれずで、こゝが大いに考へねばならぬことである。釋迦如來は此の大地有情と同時成道を、如何に説いて迷情を救ふべきかと、三七日の間尙ほ菩提樹下に在つて、思惟せられ、後ら靜かに起つて、いよいよ説法を始め、八十才の御入滅に至るまで華嚴經阿含經、方等經、磐若經、法華經、涅槃經等を説き、其の奥底には秘密經、禪をも含ませられたのである。我々が今日斯うして佛敎の有難い教旨を聞き、佛道を修して轉迷開悟することの出来るのは、釋迦如來が此世に出現して最上無上の法門を開示せられてあるからである。故に此一點を考へても常に我々は釋迦如來を崇拜せねばならぬのである。

以上は歴史上の釋迦如來を略説したのであるが、此の釋迦如來に就て、法身と報身と應身との三身の觀方のある事を忘れてはならぬ。印度に出現せられ、八十歳の壽を以て入滅せられたのが應身で、宇宙の眞理を悟つた結果として得られたのが報身で、法身とは所謂宇宙の眞理其物を指したのである。而して密教でいふ釋迦如來は、法身の方を指すのであるが、今此の胎藏界曼荼羅の釋迦如來は、即ち釋迦院の主尊で、法報應の三身何れにも通ずる、三身即一の釋迦如來である。其の御姿は右の手を上へ舉げて、手招ぎして居るやうにして居られるが、これは釣召の印とて強剛難化の衆生を引き寄せて濟度せんと、大慈大悲の御手を舉げて招き玉ふ形である。又左の手を膝の上に置いて掌を上にし、大指を屈して掌中を押し玉ふは招き寄せたる衆生をシツカと押へて引き留め、散り離さぬといふ御心を表したものである。

第三 文珠菩薩

文殊菩薩は、普賢菩薩と共に釋迦如來の兩脇侍で、文珠は智慧普賢は慈悲を司るものであることは、等しく人の知る所である。諺にも「三人寄れば文珠の智慧」といひ或は智慧の勝れたるものを稱して、文珠菩薩の再來かなどいふ如く、此の菩薩は智慧の本尊である。胎藏界曼荼羅の中臺院に在つて、右の手に梵筵を持し、左の手に蓮上に三股杵を立てたのを持つて居られるが、普通の像は右手に利劍、左手に經文を持つて居られるのである。利劍は能斷の義を表はしたもので、一切の是非善惡を決斷簡擇すること、利劍の能く物を斷つが如しといふ意である。又左手の經文は、一切の智慧を巻き藏めたるもので、所謂宇宙に遍滿せる眞理の經文である。故に文珠菩薩は、一切衆生の覺りの母迷の妄情

をスツバリと截断して、般若の智慧を授け、本性清淨の心地開發が此菩薩の誓願である。又其の名義に就いていへば、文殊といふのは略稱で、具さには文珠師利、又は曼珠師利といひ、譯して妙音、又は妙吉祥といふ。妙音とは此の菩薩は大慈悲の力を以て、妙法を宣説して、一切衆生に聽かしめ、教導するといふ意で、妙吉祥とは、吉祥はメデタイことであるから、文珠菩薩の絶妙の大智慧は、實に萬徳の根源、安樂の妙門で、何とも彼とも言ふに言はれぬ此上もない芽出度いものであるといふ意である。されば單に智慧といふても、世間普通にいふ所の淺慮な智識ではなく、佛の悟りの智慧で、即ち宇宙の眞理、一切の皆識、一切の道徳の根源であるのである。これをモ少し解り易くいふと、智慧とは梵語の般若を譯したので、曹洞宗の高祖承陽大師は、菩薩の四攝法、即ち布施、愛語、利行、同事を四枚の般若なりと仰せられてあり。又希臘の哲學者は、知識、即ち

道徳なりと言つてあるが、斯く四枚の般若、或は道徳と一致するが如きものをこそ文珠の大智慧といふべきもので、世上所謂猿智慧、惡智慧等の如き類では断じてないことは勿論である。

然らば此の大智慧は、獨り文珠菩薩にのみあるのであつて、我々凡夫には得ることが出来ないものであるかといふに、決して左うではない。文珠菩薩といふのも、畢竟我々本來具有の妙徳を示したもので、文珠と我と別なものでなく、即身これ文珠であるといふことを忘れてはならぬ。自ら文珠の智慧を具有せることを忘れて、徒らに文珠菩薩を遠きに求め、智慧を分ち玉ひ、利益を授け玉へなど、祈つた所で、寸毫も功德利益のあるべき筈はないのである。故に我々が、本來具有の妙智を開發して、宇宙の眞理を悟り、宇宙の大精神に隨順して、其の行ひを省み、其の身を慎んで世に處すれば、此の身このまゝ、文珠菩薩であるのである。

心だにまことの道にかなへなば

いのらすとても神や守らん

で、文珠菩薩を信仰するにしても、或は他の佛菩薩や神明に祈願するにしても、心が誠の道にかなはないでは駄目、如何に大慈大悲の佛菩薩、お心よしの神明でも、まことの道に背いた心を以て救済を求めても、罰こそ當れ加護を垂れ玉ふことはない、故に祈るとか願ふとかいふことは第二として、先づ心を誠の道にはづれぬやうにすることが肝要である。天正年中、紀州に新宮若狭守といふ士があつた。武勇人に勝れ、嘗ては多くの戦功もあつて、世間に知られた程の者であつたが、吉川駿河守義輝公に事へやうと望んで西國に下り、周防の國に至り、城下の邊に近づいた頃、彼方より一人の武士が手に抜いた太刀を持ち、急いで走り来るのに逢ふた。武士は新宮に向つて、私は數年來心にかけて居た仇

を討ち、只今落ちのびやうとするのであるが、後の方から敵方の大勢が逐ひかけて来るのであるから、何うか君が此所で彼等を防ぎ留めて居て下さい、其の邊に私は逃げますから、この頼み、新宮は今途中で初めて逢ふたので、此の武士が如何なる人物であるかは元より知らないけれども、武士は相見互ひといふこともあり、頼まれて見れば厭やとも言はれず、快よく承知して彼を逃がした。スルト間もなく案の如く數十人の者が勢よく群り走つて來た。新宮はヤオラ腰なる一刀を引き抜き、「サア來い來れ」と力戦奮闘、敵は何の小癢な邪魔立てするなッ、と一度にドツと切りかゝる、心得たりと新宮は、縦横無盡に斬り巻り、忽ち五六人を斬り殺した。敵は此の勢ひに恐れて、少しく退き、今度は弓を以て射かくること、雨の如く、前箭後箭相踵いで到る。けれども新宮の身には一矢だも當らぬ、勿論新宮も必死となつて飛び來る矢を打ち拂ひ切り

拂ふては居るのであるが、然かも敵は多勢、味方は只だ一人、如何に新宮の腕前が勝れて居ればとて、カスリ傷一つも負はぬは不思議である。敵はいよゝゝ矢を射ること烈しく、これでもか。まだか。と一齊に射かける。ふと見れば新宮の頭上に怪しき一人現はれ、日輪の如く光明を放つて、雨と降りくる矢を前後左右に拂ひ落して居るのであつた。因て敵も力及ばず、此事を主君に告げると、主君も不思議に思ひ、一先づ戦を中止して、使を以て新宮に、

「汝は如何なる者で、今日斯様な振舞をなすのであるか。」と尋ねると、新宮は

「我は紀伊國新宮若狭といふ者、吉川駿河守義輝公に事へんと望み、當國に下つたのである。然るに突如此所に一士に逢ひ、我を頼みて死地を遁れんことを願ふたから、餘儀なくかゝる次第に及んだのである。」と

答へた。使者は此旨主君に報ずると、主君は近く新宮を招き、

「先きに我が家來多くの弓矢を以て汝を射たるに、汝の頭上に一神あつて此れを拂ひ落したのであるが、汝は如何なる妙術を以てかゝることを爲したのであるか。」と尋ねると、新宮も今更の如く驚き、

「我れ實に何等の神術方便を知らず、只だ年來文珠菩薩を信仰し、これに歸命して、尊像を畫き常に甲の中に安置して居るが、或は此の菩薩の加護し玉ふ所ではあるまいか。」といひ、直ちに甲を脱いで見ると、尊像の御身から汗が湧くが如くに出て居たので、新宮は「あな有難や」と感泣し、並び居たる諸士も共に其不思議なる靈驗に感心した。乃で主君は新宮に向ひ、

君が尋ねる吉川駿河とは即ち拙者である。遠路我を慕うて來た芳志は誠に嬉しく思ふが、併し今日計らずも我が家來を多く殺た故、中には

怨恨の念を結ぶものもあるであらう。故に書を太閤秀吉公に致し、彼方に頼み遣はさう。と言ふたので、新宮は其の徳情に感喜し、命に任せ、秀吉公に事へ、後には他に勝れて忠勤の譽れがあつたといふことである。これ新宮が義勇の誠に文珠菩薩の大智と感應せるものといふべきである。

文珠菩薩を一譬文珠、五譬文珠等と稱するのは譬の類より稱したので、一字文珠、五字文珠、六字文珠、八字文珠等は眞言の文字の數から分けたのであるといふ。又稚子文珠、獅子文珠等の稱もある。

第四 普賢菩薩

普賢菩薩は、胎藏曼荼羅の中臺八葉院の佛で、左手は蓮上に利劍を立てたるを持ち、右手を利刀に印せられて居る。けれども普通の像は左

手に蓮華、右手に五股の杵を持つて居られる。五股は五智を表示したもので、五智とは一に法界體性智、二に大圓鏡智、三に平等性智、四に妙觀察智、五に成所作智である。法界體性智とは宇宙萬有の本體、大圓鏡智とは宇宙萬有の現象、平等性智とは萬有は無差別平等なりと觀察すること、而して成所作智とは如上の理を體認して自利利他圓滿を計るの智をいふのである。されば今普賢菩薩が五股の杵を持って居られるのは、此の深意を示されたもので、左手の蓮華は、衆生本來の心性は、清淨無垢なること、游泥に染まぬ蓮華の如しとの意を示したものである。其の名義の普賢とは、普は普遍の義で菩薩の行徳普く法界に充滿周遍すること、賢とは佛徳に隣するを賢といふこと、十種の大願行を成就し給ふことである。所謂普賢の十大願とは、一に敬禮諸佛、二に稱

讚如來三に廣修供養四に懺悔業障五に隨喜功德六に請轉法輪七に諸佛住世八に常隨佛學九に恒順衆生十に普皆廻向である。普賢菩薩の御徳は實に此の十大願にあるのであるから、今少しくこれを説明仕やう。

第一敬禮諸佛とは一切の諸佛諸菩薩を恭敬し禮拜すること。第二稱讚如來とは一切如來の甚深の妙功德を稱揚讚歎すること。第三廣修供養とは廣く諸佛に種々の供養を盡すこと。第四懺悔業障とは無始以來造り爲せる身口意の諸の惡業は皆なこれ貪瞋痴の迷妄より生じた所のものであるから一切悉く懺悔すること。第五隨喜功德とは諸佛及び衆生が善根の功德あれば喜んで之に隨ひこれを助けて行くこと。第六請轉法輪とは諸佛菩薩を請して法輪を轉せしむ即ち説法を願ふこと。第七諸佛住世とは諸佛が既に化度すべきものが無いか

らとて涅槃の雲に隠れ玉はんとするや強いてこれを引き留めて永く此世に在つて説法教化し功德利益を垂れ玉へと至誠に勸請すること。第八常隨佛學とは常に諸佛に隨つて學び間斷なく修業を怠らぬこと。第九恒順衆生とは常に衆生に隨順して衆生苦ありて苦しめば共に苦しみ樂ありて喜べば共に喜ぶ一切萬事衆生と共にせんとのこと。第十普皆廻向とは一切の修行功德はこれを自利の爲めにせず衆生の上

に廻らして衆生に善業を得せしめんとの大願である。斯ういふと何んだか我々と普賢菩薩とはかけ離れて居るやうに思はれるが『菩提心論』に、法爾に常に普賢の菩提心に住すべし一切衆生は本有の薩埵なるが故に。

とあつて、普賢菩薩は吾々の菩提心を守護する佛であるが、吾々にして

普賢菩薩の行願を心として、これを成就すれば我が身即ち普賢菩薩である。元來一切衆生は本有の薩埵即ち普賢菩薩たるべき性質を本來具有して居るからである。然らば我々は此の普賢の十大願を如何に實行すべきかといふに、文字の上から見れば如何にも六ヶしいやうであるが、これを日常のことに比べて見ると、次ぎのやうなことになるのである。

第一の敬禮諸佛即ち諸佛を恭敬禮拜するとは、諸佛は即ち他人である。人は誰れしも自分を愛し自分を尊重せぬものはあるまい、故に自分を尊重すると共に他人を尊重すること、自分さへよければ他人は何うでもよいと言ふやうな無法な考を起してはならぬこと。第二の稱讚如來即ち如來を稱讚するとは、他人の善事善行を賞揚し少しでも他人の成功得意を嫉妬憎悪の念などを以て見ぬこと。第三の廣修供

養とは、他に接するに勉めて敬愛の念を以てし、慈善事業、救済事業等に全力を注いで盡すこと。第四の懺悔業障とは、所謂過つて改むるに憚ること勿れに相當する。第五の隨喜功德とは、他人の善良なる事業等には、自ら進んで出来るだけ助力補佐すること。第六の請轉法輪とは、勤勉進取の氣を養ふことで、他の高説明論を喜んで聞き、常に高僧の説法學者の演説等を請うて修養を怠らぬこと。第七の諸佛住世とは、これを家庭に就て云ならば、親が子に家督を相續さして、樂隱居しやうなごゝいふ時に、子はまた社會の經驗も乏しく到底自分の力では及ばぬから、是非モ一暫く隱居しないで萬事御心添を頼むといふやうな謙讓の徳をいふのである。第八の常隨佛學とは、常に先輩教師に就いて、聖賢の道を學び、人格の修養につとむること。第九の恒順衆生とは、身分の高下や、學識財産の多少等を一切忘れて衆と共に遊び衆と共に樂し

むことで、社交上人に依つて其の交りを異にするといふやうなことをせぬこと。第十の普皆廻向とは所謂自未得度先度他の大願心で、世人の爲めには、自己を犠牲にしても大いに盡すといふ精神である。斯くの如く以上十種の誓願を圓滿具備するに於ては、此身此まゝ普賢菩薩と稱することが出来るのである。

第五 地藏菩薩

地藏菩薩は六道能化の大導師で、隨所に變現示現して、衆生の苦患を救ひ玉ふ大誓願を持して居られるのである。其の名義に就て、一説には地とは地獄の衆生の意で、藏とは地獄の衆生が此菩薩の慈悲に依つて救済せられるので、此菩薩の慈悲は恰も寶藏の如しとの意からいふたので、乃で地藏と名づけたのであるともいふが、一應は尤ものやうだ

けれども聊か索強附會の感がないでもない。元來地藏とは此の菩薩の徳の廣大なることを表示して名づけたもので、大地は能く一切萬物を藏し能く萬物を益するものである如く、此の菩薩は能く一切の徳を藏し衆生に利益を興へるといふの意で、地藏と稱したものである。試みに見よ、大地は能く物を收藏し、能く物を生成發育せしむるもので、如何に汚ないものでも、それは厭やだと言はず、みな之れを受け容れて、其の汚いものを清淨にして草木の肥しにする。鼻持のならぬやうな汚れたものでも、大地へ捨てれば、それが却つて草木の肥料となつて大いに利益がある。又大地に大きな穴を掘つても痛いとも痒いとも言はず、其處へドツサリ汚ないものを積み込んで、ソナナ無理なことをしては困ると苦情も言はず、悉くこれを吸ひ取つてくれる。否なそればかりでなく、却つて汚いものが多ければそれだけ多く草木の爲に利益

があるといふ譯であるが、地藏菩薩の大慈大悲は全く夫である。如何に罪業深重の衆生でも、必ず捨て、は置かぬ、假設地藏菩薩を信せぬ者でも、方便して救済するといふ誓願で、其の救済の方法は苦患代受とて、衆生の苦患を自ら代つて受けて、衆生に安樂を與へ玉ふので、全く慈悲の最極度まで發揮せられたものである。故に十二の大誓願を發して成就し玉ふのであるが、其の一々が皆な代價的救済であるのである。

さて其の十二の誓願とは、第一獄苦代受、即ち地獄の苦患を代つて受けること。第二餓苦代受、即ち餓鬼道の苦しみを代受せらるゝこと。第三畜苦代受、第四修羅救苦、共にこれ受くべき衆生に代つて其の苦を受け、畜生道修羅道の衆生を救済せらるゝ、大慈悲である。第五三昧入定とは、心意散亂とて衆生の心がザワ／＼騒いで居て、三昧定即ち靜慮に入ることの出來ないものを憐みて、方便を廻らし誘引して入らしむ

ること。第六衆生増壽、即ち衆生の壽命を増すことで、短命の衆生には地藏菩薩の壽命を分ち與へて長壽ならしむるの誓願。彼の延命地藏と稱するのは、此の誓願を表したものである。第七病苦代受、これは衆生の病氣の苦患を代つて受けて救済せられることは言ふまでもない。

第八國難代苦、若し國に殷紂夏桀のやうな暴君があつて、無辜の民を虐げ苦しめるやうなことがある時には、地藏菩薩が代つて苦を受け、民を安んぜしむること。第九怨賊離苦、衆生が怨敵劫賊の爲めに、思ひも寄らぬ難に遭ふた場合に、一心に地藏菩薩を念すれば、即ち代つて其の苦を受け、無事に逃れしむること。第十貧窮救済、即ち貧乏人には財寶を與へて救済する。第十一官位所求、これは若し衆生ありて自ら志を伸べ道を行つて、人民の利便を計る爲めに都合のよいやうに官位昇級を望めば、方便して其の望みを満足せしむること。第十二命終現前、如何

に平生地藏菩薩を信せぬやうな強情頑固なもので、勝手にせよなど
 へ見捨て玉はず、其の人がイザ臨終といふ時に現前して救濟せらるゝ
 といふ誓願である。何と希有なる大慈悲の誓願ではないか。
 されば地藏菩薩は最も多く民間通俗の信仰の對象となり、如何なる
 山村僻地と雖も此の尊像の安置を見ざるなく、路傍の叢の中や、或は
 藪蔭などに、鳥に糞をかけられても、犬に小便をたれ流されても一向平
 氣で、悪戯兒童に鼻を缺かれやうが、亂暴な若者に頭を割られやうが、厭
 やな顔も見せず、痛いとも言はないでニコニコして居られる。地藏菩
 薩の大慈悲はどこまで深いのか計り知られぬ。されば人多く其の徳
 に皈依して、或は延命地藏又は子育地藏其の他曰く何曰く何と種々な
 る名稱を附して信仰して居るので甚しいのには小便地藏とて、小便を
 かけることに依つて願望を成就せしめ玉ふなど、信せられて居るの

もある。かくも一般民間に流行し信仰せらるゝのも、一に代償的救濟
 の本誓に因るものであらう。

大岡政談に石地藏吟味といふ珍裁判がある。江戸室町に越後屋八
 郎右衛門の手代に彌五郎といふ者があつた。或日白木綿を澤山背負
 うて本所中の郷を通りかゝつた時に極暑のこと、言ひ殊に日中であ
 るから、一休みして汗を入れて行かうと思ひ、或寺の門前に大きな樹が
 あつて、其下に石地藏が立つて居る誠によい木蔭であるから、これ幸ひ
 と荷物在地蔵の前に置いて、其の臺石に凭りかゝつて休んで居たが、い
 つか宜い心持ちになつて、ツイうとくと居眠りを始めたが、やがて前
 後も知らずグツスリと熟睡して了つた。ふと眼をさますと最早や夕ぐ
 れに間もない時刻、これは失敗つた、と見れば木綿の荷物が無い。ハッ
 と驚いて四邊を尋ね探したが遂に見當らぬ。寺へ行つて様子を聞い

て見ても更に分らぬ。これは自分が居眼りをして居た間に通りかゝりの者に盗まれたに相違ない。所の長大塚といふ人の處へ行つて相談したが少しも手がかりが無いので、彌五郎はガツカリして室町へ立ち歸り、越後屋の主人に右の咄をすると、主人は容易に信せず、木綿を賣つて遊女か博奕に費したのだらうといふ。左う疑ぐられても仕方がない。遂に宿元から右の白木綿の償ひをするやうにこのことゝなつた。所が彌五郎の宿元は生活不如意なかく、それ丈けの白木綿の償ひの出来やう筈もない。乃で彌五郎は全く自分の油断から飛んでもないことを仕出來し、宿元へまで迷惑をかけては相濟まぬから、一層死んでお詫び仕やうと思ひ、豫て懇意の友達に暇乞ひに行き、右の咄をする。友達は大いに驚き、それはマア大變だ、併し死ぬとまで覺悟したのならば、一つ南御番所の大岡越前守様へ駈込訴をして見たら宜からう。

大岡様は當今名に響いた名奉行様だから、何とか仕方もあるだらう、若しそれでも叶はぬ時に死んでも間に合ふ事だから、先づ死ぬのを左う急がないでも宜からう。といふ。彌五郎はこれを聞いて、成程と思ひ、早速南町奉行所へ駈込訴をした。けれども門の處で支へて一向取上げぬ。乃で彌五郎は三日の間、食事もしないで其處へ坐つて動かないので、役人も遂に根氣負けがして、此事を越前守へ取次ぐと、越前守は、それは人命にかゝはる一大事、捨置き難しとあつて、彌五郎を呼び入れ、一々聞き糺して、さていふやう、

「其方は地藏菩薩は國土を守る佛であるから、此所へ荷物を置けば氣遣ひが無いと安心して居眼りをした故盗まれたのであらう。是れ其方の油断とは雖も、又名に負ふ地藏に似合はず、盗まれたのを知らないとは心得難し。佛たりとも其まゝには差置かれぬ、或は盗人と同類なる

やも知らず召捕つて吟味せねばならぬ。」と早速地藏召捕り方を同心に申付けた。サア此事が評判になつて、地藏召捕りとは前代未聞、こは面白し見物せんと、我も〜と見物に出かける所へ同心が「上意々々」と呼ばはりつゝ、イザ召捕らんと近寄れば、何がさて六尺餘りの石地藏押すも引くも容易の業ではない、乃で見物人に向つて「ヤー〜、地藏の吟味見物したくば、苦しうないに依つて、見度き者は召捕りに手を貸されよ。」といふ。見物人一同こは面白しと手傳うて、地藏に繩をかけ、車に乗せて曳いて行く、沿道の人々亦これを見て不思議に思ひ、何うした事かと尋ねれば、實はこれ〜然か〜、吟味を諸人に見物許すと聞いて、こは珍らし見物せんと従ひ行く。やがて南町奉行所へ到れば、地藏を白洲へ持ち込み、いよ〜吟味と相成つた。見物人は四邊に黒山の如くに押寄せて、怖いもの見たさに首さし延べて眺めて居る。

大岡越前守は嚴然として地藏に向ひ、

「如何にコレ地藏、其方儀名高き佛にして、南無地藏大菩薩と諸人に尊敬せられ、一切衆生を利益する身にありながら、越後屋八郎右衛門の手代彌五郎の荷物白木綿數多を盗まるゝを知らずとは何事ぞ、但しは得心づくにて盗ませしや、さらば早速に白狀せよ、如何に〜。」と問ひつめたが、もとより石の地藏の口をきくべき筈がない。スルト越前守は、一段と聲高らかに、

「二言の答もなきは恐れ入たるか。彌五郎も其方の前なれば大丈夫と安心して荷物を置たるに、盗まるるとは其方の落度也、盗人白狀無き時は許し難し、入牢申付くべきなれども、先づ番所へ留置く、左様心得よ。」と言ひ渡し、さて見物一同に向つて、

「汝等天下の裁斷所へ勝手に入込むとは、不届至極なり、其罪許し難し。」

といひ、手下の役人に對して、「此の者共一人も逃すな、門を閉ぢよ。」と命じた。サア見物はビツクリ。到々五百人ばかりが其所へ留められて、一々住所姓名を帳簿へ記載された。此事四方へ傳つて家族や親戚の人々大いに心配し、種々と詫び入て御免しを願ふたので、兎も角も宿預けとなり、十四五日の後、彼等に對して、

「此度の事は許し難き所なれども、元は白木綿から起つた事故、白木綿一反宛の過料申付ける、三日以内に必ず持參致せよ。」と申付けられた。さて集つた白木綿凡を五百反。彌五郎を呼んでこれを見せ、此中に其方の盗まれた木綿は無いか。と一々検査させた。所が其中に盗まれた品が二反あつたので、早速納めたものを呼び出し、賣主を問ひ糺し、それからそれへと買ひ出した先々を調べて、遂に其の盗人をつき留め

て召捕り、盗んだ白木綿も大概取り戻して、彌五郎に下げ渡して、尙ほ將來を懇々と戒め、佛に苦勞を掛けてはならぬぞと言ひ、又白木綿一反宛持出したものを呼び出して、地藏を吟味したる處、悉く白狀に及び、木綿は残らず取り返したに依り、其方共の木綿は一々下げ渡すに依り、受取れよ、其代り右地藏に赦免申付けるに依り、其方共中の郷へ持ち行き安置致せよ、と申渡され、盗人は重き仕置を仰せ付けられた。

此事があつてから、其地藏が急に名高くなり、何事でも願をかければ必ず靈驗があるといふので、遠近より參詣引きも切らず、且つ召捕られて繩目に遭ふた地藏故、願掛けの時、繩を以て堅く縛り、願望を叶へて下されば解いて上げますといふので、誰れいふとなく、縛られ地藏と稱し、諸人の皈依願する盛んになつたといふ。

往古來今、佛菩薩として繩目の厄にかゝり、白洲へ引き出されて裁判

を受けたのは蓋し此の地藏の外にはあるまい。これ甚だ滑稽な話ではあるが、又一面地藏菩薩の代價的救済の本旨が顯はれて居て面白く感ぜられるではないか。かくも廣大なる慈悲の菩薩ならば、横着者の信仰には訛ひ向きである。併し如何にお人よしの地藏菩薩でも、家業を怠つて貧苦を救ひ玉へとか、衛生に注意しないで病氣平癒や長壽を願ふ如きお門違ひの信仰をしたのでは、ヨモヤ御利益も授け玉はぬであらう。

閑話休題、地藏菩薩は胎藏界曼荼羅では、左手蓮上に寶幢を立てたの
 を持し、右手に寶珠を載せてあるが、普通の尊像は僧形で、右の手に錫杖、
 左の手に寶珠を持つて居られる。即ち錫杖はこれをガサ／＼と拂つ
 て、一切衆生無明長夜の夢を覺まし、寶珠は衆生の願望を満足せしむべ
 く寶財を興ふるとの意を表示したものである。

第六 彌勒菩薩

彌勒菩薩は胎藏曼荼羅の中臺八葉院に在りて、左の手を胸に當て、
 開き右の手に蓮上に寶瓶のあるのを持つて居られる。彌勒とは或
 は姓であるといひ、或は名であるといろ／＼な説があるけれども、夫等
 の詮索は暫く措き、譯して慈氏といふので、國人を慈育するに依つて名
 づけたものであるといふ。此菩薩を一生補處の菩薩或は當來三會下
 生の菩薩とも稱するのであるが、それは釋尊の遺囑を受けて當來五十
 六億七千萬年の後に此の娑婆世界に下生して、無明の暗に迷へる一切
 衆生を救ふとの誓願を立てられて居られるからであるのである。即
 ち釋迦如來は三千年の昔此の娑婆世界に出現して、教法を弘宣流布せ
 られ、八十才の壽を以て涅槃の雲に隠れさせ玉ふたのであるが、其の時

彌勒菩薩に對して滅後の衆生濟度を遺囑せられた。彌勒菩薩は委細承知いたしましたと固く約し、五十六億七千萬年の後、釋迦如來の教法が全く地を拂うて衰滅する時に即ち下生して微妙の法門を開示し衆生を引導救濟せられるのである故に彌勒菩薩は釋迦如來の後繼者即ち補處の菩薩であるのである。

五十六億七千萬年といへば實に莫大の年數で、現代は釋迦如來が入滅せられてから概算僅かに三千年しか經過しないのであるから、また彌勒下生までには前途遠遠である。今は釋迦如來出世と彌勒菩薩出世の中間にあるのであるから、吾々は二佛出世の中間に生れたものであるといふべきである。

然らば彌勒菩薩は今何處に何うして居られるかといふに、兜率天即ち兜率陀天或は都史多天都史陀天ともいふが、通常略して兜率天とい

ふに住居せられて下生の期到るを待つて居られるのである。『佛說觀彌勒上生兜率陀天經』に

彌勒先づ波羅捺國劫波利村婆々利大婆羅門の家に於て生し、劫後十二年二月十五日日本の生處に還つて結伽趺坐して滅定に入るが如く、身紫金色光明豔赫として百千の日の如し上つて兜率天に至る云々。

とあり、又同經に、

閻浮提の歲數五十六億七千萬歲にして、爾して乃ち閻浮提に下生す……乃至……是を彌勒菩薩閻浮提に於て歿して、兜率陀天に生する因縁と名く。

と説いてある。されば彌勒菩薩は嘗て印度に出世せられたのであるが釋迦如來に「まだ貴様の出る幕ぢや無いから引込んで居れ」と叱られ

た譯ではないが、まだチト出るのには早いから、我が滅後の衆生を宜しく頼むと言はれたので、「それぢや左ういふことに致しませう」と言つたやうな譯で、兜率天に上つて居られるのである。故に普通の尊像は獅子座寶蓮華の上に結伽趺座とて右の足を左の股の上に安じ、左の足を右の股の上に安ず、即ち左右の足をシツカリ組み合せて坐し、五色の寶冠を戴いて、左右の手を膝の上に法界定印とて、左手を仰向けに置き、其上に右手を重ねて仰向け、兩の手の大拇指の頭を拄へしめ、其中に五輪の塔を載せて、端然としてござるのである。此の五輪塔に就ては、密教の方では深秘の解釋があるとの事だが、今は略して置く。其塔の中には釋迦如來の舍利が收めてあるので、即ち彌勒菩薩は釋迦如來を守護して、如來滅後の衆生濟度を一切引受けた後繼者であるといふことを表示したものである。

さて此の彌勒菩薩の居られる兜率天は、阿彌陀如來の極樂淨土と相對して、頗る大いに勢力のあつたもので、極樂往生よりは、寧ろ兜率往生を願ふ者が多かつた時代もあるのである。それといふのは此兜率天とては譯して妙足又は止足といひ、欲界天の中にあるのであつて、此天では精神が清淨で、淫心などは全く避けて、了ふことは出來ぬが、マア起さぬ。凡て五欲の境に於て止足するのである。而して此天は欲界の凡夫が容易に往生することが出來、未來彌勒菩薩の下生を待つて、其の引導教化を受けて成佛することが出來るといふ考ひから、一般の信仰が頗る盛んであつたのである。

第七 藥師如來

藥師如來は、具さには藥師瑠璃光如來といひ、又は大醫王とも譯して

ある。此の如來は十二の大誓願を發して、一切衆生を救濟し玉ふのであるが、今藥師又は大醫王といふのは、十二誓願中の第七諸病悉除の願に依つて名けたものである。藥師如來が嘗て因位の修行の時、瑠璃の寶壺を持して一人の病を患ふ者の爲めに、其寶壺の中から藥を取り出して與へた所が、其の人の病氣が忽ち皆平癒したこのことである。これに因つて十二の誓願中第七に此の誓願を發されたのである。其の第七の誓願とは

願くは我れ來世に菩提を得し時、若し諸々の有情衆病に逼切せられて、救ふことなく、歸ることなく、醫なく、藥なく、親なく、家なく、貧窮多苦ならんに、我が名號一度其の耳を経れば、衆病悉く除いて身心安樂にして、家屬資具悉く皆な豊足し、乃至無上菩提を證得せん。といふので、此の意に依つて名號とせられた程であるから一般の信仰

も亦こゝにあるやうであるが、藥師如來の大慈悲は、コンナ些々たることを主とせられるのではない。今其の十二大願を略説すれば、

第一の大願は、自身の光明照耀に依つて、一切衆生をして自身の如く三十二相八十隨形を具せしむるの願、即ち衆生に端嚴微妙の相を得せしむること。第二の大願は衆生の意に隨うて、光明を以て諸種の事業を成辨せしむること。第三の大願は、衆生をして缺乏を感せしめず、無盡の受用を得せしむること。第四の大願は、邪道を行する者を誘引して皆な菩提道に入らしめ、大乘の悟りを開かしむること。第五の大願は衆生をして梵行を修して清淨なることを得、決して惡趣に墮せしめざること。第六の大願は、六根具足して醜陋ならず、身相端正にして諸の病苦なからしむること。第七の大願は、前述の如く諸病悉除。第八の大願は、女を轉じて男と成し、丈夫の相を具して成佛せしむること。

第九の大願は、外道の邪見に捕へられて居る者を正見に復せしめ、無上菩提を得せしむること。第十の大願は、もろくの災難刑罰を免れしめ、一切の憂苦を解脱せしむること。第十一の大願は、饑餓に悩まされ食を求むる者には、飯食を飽満せしめ、又法味を授けて安樂を得せしむること。第十二の大願は、所求満足の誓ひで、衆生の欲するに任かせて衣服珍寶等一切の寶莊嚴を得せしめんとすることである。

かくも希有廣大なる大誓願を成就し玉ふのであるから、古來其の信仰も非常なもので、奈良朝時代に聖武天皇が、諸國に國分寺を建立せしめた時に、藥師如來を以て本尊とせられたのを見ても、思ひ半ばに過ぐるのである。併し今は概して病氣平癒の本尊として、第七の大願が最も信仰せられ、殊に眼病治療の守護として信せられて居るやうである。藥師如來の尊像は、多く右の手を施無畏印にし、左の手に藥壺を持つ

て居られる。これ施無畏印は、即ち無畏施で布施の上乗なるもの、藥壺は病苦に悩める衆生に藥を與へるの意を示したものである。又兩手で藥壺を持ち、或は藥壺の印を結んで居られるのもあるが、共に應病與藥の救濟を表したものである。勿論である。藥壺の印とは、法界定印とよく似て居るので、ともすると間違ひ易いが、法界定印の大拇指を尖らしたのが藥壺の印である。

因に藥師如來の兩脇侍は日光菩薩、月光菩薩で、此の外に十二の大願を成就すべく、十二の眷屬がある、これを藥師十二神將といふ。而して此十二神將の本地は觀音阿彌陀地藏等の佛菩薩であるが、これを十二支に結合せしめたもので、日光月光の兩菩薩と、十二支とで、時間的にも空間的にも、一切縦横の關係を網羅したものであるといふ。

今十二神將并に其の本地と十二支との配合を示せば左の如しであ

る。

十二神將

毘	招	真	摩	波	因	珊	類	安	迷	伐	宮
羯	杜	達	虎	夷	達	底	備	底	企	折	毘
羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅
(本地釋迦)	(本地金剛手)	(本地普賢)	(本地藥師)	(本地文珠)	(本地地藏)	(本地虛空藏)	(本地摩利支天)	(本地觀音)	(本地阿彌陀)	(本地得大勢)	(本地彌勒)
子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥

十二支

臨濟宗の宗祖榮西禪師は、或時貧乏人が来て、「何うか御助け下さい、我々一家の者は實に難澁いたして居ります、今はモ一食ふ物も無くなつ

て只だ餓死を待つより外は無いです、何うぞ御恵み下さい」といふと、「ウム、それは困るだらう、可愛相だ、何か恵んでやりたいと思ふたけれども、御自分とても枯淡の生活をして居られるのであるから、これぞと思ふ貯へも無い。そこで薬師如來の御光を引きちぎつて、「ソレ、これを與るから、賣り拂つて幾分かの補ひにするが宜い」と無造作に與へたので、お弟子がこれを見て大いに驚き、「ソレナ事をなさつては佛罰が當りは致しませんか。」といふと、禪師は「ナ、左んなことがあるものか、佛が此世にましましたならば、何んの御光を折つたからとて罰が當らうぞ。」と言はれたとのことである。これ全く無縁の大悲から出たので、又以て薬師如來の大誓願を發揮したものだといふべきであらう。

第八 觀音菩薩

觀音菩薩詳しくは觀世音菩薩又は觀自在菩薩と云うて、我が國では昔から今日に至るで最も廣く信仰せられ、西國三十三番の觀音を始めとして、關東には秩父三十三ヶ所或は坂東三十番等、到る所に觀音の尊像は祀られ、多く信仰せられて居らぬ所はない。而して其の名稱には十一面觀音、千手觀音、如意輪觀音、或は準提觀音、聖觀音、又は子安觀音、馬頭觀音等といろくあり、上州の石打には瘤觀音など、稱するものもあつて、多くの信者を聚め、をりくは諸方に出開張をして、諸人の渴仰を満足せしめて居るものもある。中には何觀音と稱すべきか名の付けやうも無いやうな觀音の像も澤山ある。斯様に多くの稱號があり、異様の像までも澤山にあるといふのも、如何に觀音の信仰が盛んであり

廣く行はれて居るかを察せらるゝのである。それも其の等、觀音菩薩即ち觀世音とは、聞聲悟道の、大士で、世間諸の衆生が、いろくの苦患を受けて居る其苦しみの音を觀察して、直ちに其の苦に應じて救濟せらるゝといふ所から、其名とせられたのである。又觀自在とは衆生を觀察して自在に教化せらるゝといふ意味から稱したので、何れにしても觀音菩薩の功德利益の廣大無邊なるを表しての名號である。

釋尊が出世の本懷を宣説せられたのだといふ法華經二十八品の中の第二十五品、普通觀音經と稱せらるる普門品は、特に觀音菩薩普門示現の功德を讚歎せられたものであるが、法華經二十八品全部が觀音菩薩の廣大なる功德を讚歎したものであるともいふべきで、觀音信仰の盛んなるのも、豈に偶然ならんやである。觀音經には、

若し無量百千萬億の衆生ありて、諸の苦惱を受くるに、是の觀世音

菩薩を開き一心に稱名せば、觀世音菩薩即時に其の音聲を觀じて
皆な解脱を得せしむ。

とあつて如何なる苦患でも其の音聲を觀じて教化救濟せらるゝといふのが此菩薩の大誓願である。而して其の救濟の方法たるや對機應現で觀音經には三十三身に變現して說法せらるゝと説いてある。即ち佛身を以て度すべき者には佛身を現じて說法し乃至長者居士或は童男童女天龍夜叉等皆なそれ〴〵に身を應現して說法救濟せらるゝといふのである。

最近大道長安に依つて開られたる救世教は、實に觀音菩薩を信仰の對象として一派を立てられたもので、長安は先年世を去り、現今は文學士吉田修夫氏が救世教第二世として、盛んに信仰の道を宣傳して居らるゝ。吉田修夫氏はもと基督教の信者であつて、帝國大學に入り初

めは佛教を攻撃するには豫め其の教理を研究するが必要である。食はず嫌ひの攻撃では甚だ根據が薄弱で成功は覺束ないと考へて、佛教研究に志したが、一口に佛教と言つても、頗る廣大なもので、何處から研究を始めてよいか一寸手がつかない。乃で先づ世間に最も廣く信仰せられて居る觀音とは如何なるものか、これを一つ手始めとして研究して見やうと思ひ立つて、いよゝ研究に着手したのであつた。所が研究の歩を進むるに従つて、それからそれへと甚深微妙の玄理あるを證り、遂に基督教の教理の如きは、到底遠く及ばぬことを知つて深く觀音を信仰し、斷然基督教を捨て、「觀音の信仰」といふ一書を世に公にして、廣く信仰を告白し、やがて大道長安の後を受けて救世教第二世となり、觀音の救濟を宣傳し、其の信仰をすすむるやうになつたのである。とさる雑誌の記事に見たことがあつたが、これに依つて見るも古來上

下を通じて観音の信仰の盛んなる所以を察すべきではないか。
 胎藏界曼荼羅の観音院には、三十七尊あり、其他の院にも在らせらるゝが普通観音菩薩の尊像は左の手に蓮華を持ち右の手を開いて、開花葉の勢を爲して居られる。これ即ち蓮華は泥より出で、泥に染ます清淨無垢なるもの、吾々とても其の如く、日夜煩惱妄想の淤泥に沈んで居るけれども、其の本心自性は潔白清淨にして、恰も淤泥に染まぬ蓮華のやうなものであるとの意を示し、右の手の開花葉の勢といふのは、本心自性の蓮華の如く清い満徳が開きつゝあることを示して居るのである、されば其の聞聲救済といふのも、畢竟自己の自覺を促し、蓋天蓋地なる自己の光明を發揮せしむるにあるので、豈にたゞに三十三身の説法のみならずや、實に無量百千萬億の身を化現して、常に説法教化して居らるるのであるから、宜しく古人の所謂

一 松は吹く説法度生の聲柳は染む観音微妙の相の深意に参究することが肝要である。

今は昔、上總無宿小鼠定五郎といふ大盗人があつた。或時本所一ツ目橋へ通りかゝると、年頃六十許りの老人が、アワヤ身を投げやうとして居るので、流石の大盗人でも惻隱の心があつて、オット危ない、老爺さん待ちなさい。」と抱き止め、一ツより無い命を捨てやうといふには、何か深い仔細があるだらう、事に依つては、力にもなつてやらうから、話して見い。」といふと、老人は「イ、エ何うぞ放して死なして下さい、何うしても生きては居られないのですから、助けると思つて死なして下さい。」と身を悶く。「ハハア、助けたり殺したり、そんな自由なことが出来るものか、マア話して見るがよい、仔細を聞いた上で、これは成程死んだ方が宜いと思へば手傳つても殺してやる。」乃で老人は「ハイ、それでは一通

りお聞き下さい。」といふて、自分は奥州二本松の一寸手前杉田村の名主吉右衛門様から江戸の殿様南割下水の小杉五郎兵衛様へ上納する金子二十兩を預つて来たのだが、今日しも小杉様へ行かうと思つて、宿を出て来ました。途、中兩國橋の邊で其金を釣り取られ、何うすることも出来ないから死んでお詫を致さうとの覺悟、併し兩國橋は今日川開きとかで賑かですから、此所まで来て、人目の無いを幸ひに川の中へ飛び込まうとしたが、さて故郷に残つて居る婆々のことなど考へてグツグツして居るうちに貴下に見付つたやうな次第と物語つた。定五郎はこれを聞いて、それは大きに氣の毒のこと、思ひ、

「僅か二十や三十の金の爲めに、命を捨てるのは、餘り生命の安賣りといふ者だ、マア何んとか分別もあらうから俺と一緒に、お出でなさい、と近所の料理屋へ連れ行き、老人に酒を飲ませて置いて、チヨット外へ出て

行つたが、直ぐに歸つて来て、「サア老爺さん、金を工面して来たから、これを以て用を濟まし、無事に國元へお歸りなさい。」と二十兩の金子を與へた。老人は夢かどばかり驚き喜び、初めは見す知らずの他人にコナ大金を貰うてはと辭退したが、強いて呉れたので押戴き、貴下は何處の何方様ですか」と問ふと、「イヤ左う聞かれては愧かしい、老爺さん驚いては不可よ、俺は上總無宿の小鼠定五郎といふ盗人だ。随分今までに悪いことをしてあるから、明日にも御用の聲がかゝつて召捕られ、ば首の無い身體だ。お前と斯ういふことになるのも何かの因縁だらう、風の便りにでも俺が召捕られたと聞いたら、首の無いのは定つてるのだから、線香の一本も供へてくれ。」といふ。老人はこれを聞いて、「ア、左うですか、他人は兎に角私の爲めには大恩人命の親のお盗人様、御恩は決して忘れませぬ、若しもの事のある時は、必ず懇ろに弔ひ供養を

致します。』と云うて、厚く禮を述べ、別れを告げて、用事を済まし、國へ歸つて事の次第を名主に告げ、若し定五郎が首の座へついた時に助けるやうな工夫はあるまいかと相談して、近所の觀音寺の住持に尋ねて見ると、それは觀音様を信仰すれば助けることが出来る、觀音經の中に、或遭王難苦、臨刑欲壽終、念彼觀音力、刀尋段々壞、といふ句があるから、これを一心に唱へて觀音様を念ずるがよい。』と教へてくれたので、老人はそれが何の意味だか解らぬが、何うか定五郎が助かるやうにと一心に其の句を唱ひ、仕事をする間も口に絶すやうな事はなかつた。遂には近所の子供までが、面白半分に流行唄でも謠ふやうに、或遭王難苦……と唱ふるやうになつた。

定五郎は其年の秋遂に惡運つきて召捕られ、取調べの結果入墨再度斬られ凶狀免れの罪過で、死刑と極つた。其時死刑囚が都合十一人あつた。死刑に處するには、奉行から老中へ伺書を出して、老中の裏印を得て始めて行ふの規則である。然るに何うした譯か、定五郎の分には裏印が無かつた。奉行所でも不思議に思ひ、御老中様には決して依怙最負はない筈、然るに御落印とは可怪しい、これは必ず陰德のある者であらうといふので、裏印のない者を刑に處することは出来ぬから、無罪放免となつた。定五郎は夢ではないかと驚き喜び、それに就けてもこれまでの惡事の數々が空恐しくなり、端なくも發露懺悔して、剃髮染衣の僧となり、罪障消滅の爲め諸國行脚の旅に出かけた。

定五郎の今道心は廻り廻つて奥州二本松の近在に到つた、それは曾て老人を助けてから丁度三年目であつた。ふと路傍の貧しげなる家の前に『上總無宿小鼠定五郎天明三年五月廿八日』と石に彫り付けて建てられてあるのを見て、これは不思議と近寄つて見ると家には一人の

老人が白を返した上で藁を打ちながら頻りに或遭王難苦臨刑欲壽終と唱へて居る。定五郎はいよ／＼不思議に思ひ段々様子を尋ねて見ると先年自分が助けた老人であつたことが分り老人も亦命の恩人が来たといふので喜び此事を名主に話すと名主吉右衛門も非常に喜んで先年老人の受けた恩を謝し且つ田地若干を施して此所へ堂を建て一生安住の地と定めたが宜からうと勸めたので定五郎は其の好意を喜び其所に止つて念佛三昧に日を送り九十五歳の長壽を得たこのことである。

斯の如き靈驗の物語や傳説等は、観音菩薩には殊に澤山あるが、強ち迷信なりと一笑に附し去るべきものでもあるまい。

第九 勢至菩薩

勢至菩薩は開運の佛として尊崇せられて居るのであるが、今日の言葉でいへば、努力主義とか、精力主義とか言ふのが、此菩薩の本誓を活動したのといふべきである。即ち一切衆生が此菩薩を信仰すれば無上の勢力を附與し玉ふといふので所謂人をして奮發努力せしむるの功徳を具備し玉ひ、開運發展の域に導き玉ふといふのである。今二三の經文にある句を抄出して此の菩薩の徳を證すれば、「觀無量壽經」には、智慧の光を以て、普く一切を照らし、三途を離れて無上力を得せしむるが故に大勢至と名く。

とあり、又、

此の菩薩行く時十方世界一切震動す……中略……此菩薩坐する時十方の國土動搖す。

とある。又「思益經」には、

我れ足を促すの處三千大千世界及び宮殿を震動するが故に大勢と名く。

とあり『大日經疏』には、

大勢至を得ること世の國王大臣の威勢自在なるが如し故に名けて大勢と爲す。

とあるが如き皆な勢力至極の意を示したものである。

勢至菩薩は、觀音菩薩と共に阿彌陀如來の兩脇侍で、觀音菩薩は慈悲の徳を表示し、勢至菩薩は智慧の威勢を示したものである。故に勢至菩薩の尊像は左の手に蓮華を持つてござるが、此の蓮華は觀音菩薩の開いたのと反對に、まだ蕾である。而して右の手で其の蕾を開かせやうと力むるの姿勢をなして居る。これ取りも直さず人々に菩提心を發させやうとの誓願を表したもので所謂奮發努力して開運幸福を得

るの意を示したのである。即ち勢至菩薩は因で、觀音菩薩は果、勢至菩薩の奮發の因に依り、觀音菩薩の廣大の慈悲を被るの果を得、而して阿彌陀如來の極樂淨土へ往生することが出来るのであるといふ意味で、觀音勢至の二菩薩を阿彌陀如來の兩脇侍として現はしたものである。されば人は勤勉努力の因に依つて、富貴榮達の果を得、安穩幸福の生活を得ることは、蓋し當然の理で、勢至菩薩が開運の守本尊たる所以も實にこゝにあるのである。故に人は誰れしも開運幸福を希はぬものはあるまい、開運幸福を望むならば、宜しく日夜に勢至菩薩を信仰すべきであるが、それに就けても勢至菩薩の本誓は、精力的主義努力主義であることを忘れてはならぬ。

二宮尊徳は、幼少よりよく父母に事へて刻苦勉励し、十四歳にして父に別れ十六歳にして又母に別れた。それより親戚の萬兵衛といふ者

の家に寄食して居たが、其の辛苦艱難は一通りではなかつた。晝は専ら萬兵衛の爲めに農事を働き、夜は學問に志して寝る間もなく勉強した。スルト邪見なる萬兵衛は無益に油を費すこと、理も非もなくガミ／＼叱言を言ふ。尊徳は涙を呑んで不幸を歎じ、一層死んで了はふかと思ふことも、一再では無かつたが、又考へ直してはイヤ、自分は何うあつても父祖の家を興さねばならぬ責任があるのだ、コンナ女々しい根性の意氣地なしでは駄目だ。」と自ら勵まし、苦心慘澹して川沿の瘠地を耕し、其處に油菜を蒔いて七八升の收穫を得、それを油に換へて又夜學を勉めた。スルト胴慾非道の萬兵衛は、又これを咎めて、

「貴様は自分で油を買うて夜學をするのだから宜いと思ふか知らぬが、全體學問をして何にする。大馬鹿者め、ソナ事をする隙があるなら繩を縛ふとか、荏苒でも織つて家の助けをするがよい、貴様を一人喰はし

て置くのは容易のことぢやないぞ、よく考へて見ろ。」と無法なことをいふ。尊徳は心で泣いて柔順に謝し、それから毎夜遅くまで仕事をして、家内中の寢静まるを待つて、燈火には光の外へ漏れないやうに着物や風呂敷をかけて、一心に讀書を學び曉に至りて止むを常とした。而して日中は素知らぬ顔して、疲勞の色もなく業務に力め、少しの暇を盗んでは薪を拾うて賣り、或は他に雇はれて賃錢を得、之れを庄屋に預けて、一貫になると、自分の油買ふ丈けを残して、他は悉く近所の貧民に施すを唯一の樂しみとして居たのである。

或年洪水の爲めに被害甚しく、多く不用の土地が出来たので、尊徳は休日を利用してこれを修理し、村民の捨てた秧苗を拾うて植え付けた所が、秋になつて思ひも寄らぬ一俵の收穫を得たのである。尊徳は大いに喜んで、これで父祖の家を再興しよう。一俵の米は僅かだけれど

も、積り積れば澤山になるから、決して家を興すといふことが出来ぬこととはあるまい。」と堅く心に誓ひ、ますます奮勵努力して、數年の後には數俵の收穫を得るやうになつた。乃で万兵衛の家を辭し、自分の家に歸りて破損を修め、數俵の米を基として専ら農事に盡し、漸く富むに從ひて田畑をも買ひ求め、遂に父祖の家を再興するに至つたこのことである。

尊徳に勢至菩薩の信仰があつたか何うかは知らぬが、其の勤勉努力はよく勢至菩薩の誓願に冥合するもので、所謂祈らすとても神やまもらんの道理。今日農業の神様とまでに尊敬せらるゝのも、決して偶然のことではないのである。尊徳嘗て示して曰く、

天地の恵み積み置く無盡藏

鍬でほり出せ鎌で刈りとれ、

と。よく此の意を得れば、祈らすとても勢至菩薩の大利益を被ること疑ひなしである

第十 阿彌陀如來

阿彌陀如來は、西方極樂世界の教主で、如何なる極重惡人でも、只だ一心に南無阿彌陀佛と、六字の名號を唱へさへすれば、必ず助けにや置かぬ、濟はにや置かぬとの大誓願とは、能く淨土門の説教師から聞く所で、三才の童子も知つて居る。苟くも我が國民として、阿彌陀如來を知らぬ者、南無阿彌陀佛を口にせぬものは、恐らく一人もあるまい。たゞひそれが佛教信者でなくも、阿彌陀如來とは、如何なる佛であるかといふことは、臆氣ながらも皆辨へて居るであらう。或は法華宗や神道は南無阿彌陀佛など唱ひないといふ者もあるかも知れないが、併し口に

唱ひないまでも、滿更之れを知らないで唱ひないのであるまい。大岡政談に念佛返濟などいふ珍裁判があるが、法華宗の信者が如何に念佛を嫌ふとしても、其の理非の論は別として、少しでも阿彌陀如來のことを知つて居て、ソナものは不必要だ、信するに足らぬというて嫌ひ退けるのであらう。斯の如く大勢力を有する阿彌陀如來中には佛敎信者は悉く南無阿彌陀佛を唱ふるものと思ひ或は何佛何菩薩を禮拜するにも、南無阿彌陀佛と唱ふればよいものだとまで思はれて居る程の阿彌陀如來は何故に斯くも大勢力があるのかといふに即ち阿彌陀如來の因位法藏比丘の本願の廣大無邊の慈悲に因るものであることはいふまでもない。其の本願は四十八あるが、一々擧げるのは煩しいから、其の中最も大切とする所の第十八願を示せば、

設ひ我れ佛を得んに、十方の衆生、至心に信樂して我が國に生せん

と欲して。乃至十念せんに、若し生ぜずんば正覺を取らじ云々。といふのである。實に稀有殊勝廣大無邊の本願ではないか。阿彌陀如來は密敎の方では、金胎兩界曼荼羅の各西方にあるので、大日如來の眷屬のやうになつて居るが、淨土敎の方では、唯一絶對の教主である。これ其の見地が異なるからで、阿彌陀如來其れ自身の功德光明は不増不減なること勿論である。

さて阿彌陀とは梵語で譯して無量壽又は無碍光といふ。彼の『正信偈』の初めに、歸命無量壽如來とあるのは、即ち「南無阿彌陀佛」を譯したものである。無量壽とは限りなき永遠の壽命、無碍光とは限りなき廣大の光明で、即ち前者は時間的無限後者は空間的無限を意味し、時間的にも空間的にも無限絶對なる宇宙の實在を人格化したものである。斯ういふとチト理屈ツぼくなるが、全くそれに相違ない。さればこそ能

く無量の光明照耀して、無量の衆生を救ひ、皆な淨土に往生せしめて、無量の壽を得せしむるといふ大誓願を成就せしむるのである。「阿彌陀經」には、

彼の佛の光明無量壽にして、十方の國土を照す、障碍する所なし、故に號して阿彌陀と爲す。

とあり、又

佛の壽命及び其の人民も、無量無邊阿僧祇劫なり、故に阿彌陀と號す。

とあつて、壽命、光明の無量なることを説いてある。

又「大日經疏」には

西方に於て無量壽佛を觀せよ、此れは是れ如來の方便智なり、衆生界の無盡なるを以ての故に、諸佛の大悲方便亦終盡なし、故に無量

壽と名く。

と説明してあるが、こゝに「如來の方便智なり」といふのは、密教の見地から、大日如來を唯一絶對の實在とするからである。

阿彌陀如來の尊像は普通彌陀定印に住してござる、彌陀定印といふのは、兩手を大指と頭指との頭を合せて圓い形を造り、左の手を下にして掌を重ね、中指以下の三指を組み合せて膝の上に置くのである。これ菩提心の滿月の如く清淨なるを表したのであるともいひ、又此の圓い形は轉法輪即ち説法の印であるともいふことである。又彌陀定印を引き離して、右の手を前に立て、左の手を腰のあたりに垂て居る尊像もある。これは活動の意を示したもので、前の膝の上に重ねたのは静止の形である。されど動中に靜あり、靜中に動ありで、暫く他を攝して一を現はしたに過ぎぬ。

さて此の量無壽に就て思ひ出したが彼の有名なる近世の高僧と言はれた越後の良寛和尚の長壽の祈禱の話である。良寛和尚は越後國三島郡國上の山中に庵を結び一日に米五合さへあれば外に求むる所はないといくので、五合庵と名づけて住せられた。或日のこと、一人の老人が尋ねて来て、

「私は今年八十になりますが、まだ何うも死にたうはありませぬ、モチツト長命したいと思ひます。」と話し出す。良寛和尚は、
 「ウム、尤もだ、誰れしも幾つになつても死にたく無いのは人情だ。」と同情する。

「ハイ、併し無常の風は時を嫌はぬ世の習ひですから、何時其の風に誘はれるかと思ふと心細うございます。乃で一つ和尚様に間違ひなく長命するといふ御祈禱を御願ひに上りました。」といふ老人の顔をつく

くと眺めて良寛和尚は、

「ホオ、それはよい所へ御氣がつかれた。御望み次第大丈夫間違ひないといふ長命の祈禱をして上げやう。全體幾才位まで生れば宜いのかね。」と尋ねると、老人は、

「ハイ、幾才までと定めても來ませんでしたでしたが、せめて百才位まで願はれませうか。」といふ。和尚は最も眞面目に、「ラーム、百才迄か、タツタそれ丈けでよいのか、お前さんは慾の小さい人ぢや、喃それぢや直ぐに祈禱をして上げやう、百一歳になつたら、正月の元日に死んでも宜いのか。」

斯う言はれて老人大に驚き、

「マ、一寸お待ち下さい、考へて見れば、百一歳になつたら死んでも宜いとは思はれませぬ、モチツト長命をしたいと思ひます。」

「ハツハツハハア、左うだらう。モチこれなら死んでも宜いと思ふ、ギリ

「決着の所を言うて見なさい。」

「ハイ、それでは二百、イヤ三百才位まで願はれませうか。」良寛和尚はニツコリして、

「矢張り慾が小さい喃タツタ三百才か。アノ鶴でさへ千年の壽命を保ち、龜は萬年も長命するといふではないか、萬物の靈長たる人間が、三百才位の壽命で澤山とは何事だ、イツン死なぬ祈禱をしては何うぢや。」

「はい、ソナ祈禱が願はれませうか。」と問ふた。そこで良寛和尚は、「元來佛様のみ教は、死なぬ御祈禱が目的である。」と言うて、叮嚀に佛敎の大精神を説明して聞かせられたとのことである。歌に曰く、

百年を祈る人こそはかなけれ
もとより死なぬ心ある身に、

と、阿彌陀如來の本願によりて、無量壽無碍光の慈悲に攝取救濟せられんと願ふ者も、こゝまで、到らねば駄目である。

第十一 阿闍如來

これまで述べた處の佛菩薩は世間一般に流行といふも可笑しいが、大低能く知られ信仰せられて居るものであつたが、此の阿闍如來は餘り聞かぬ佛世間にも左うハヤラヌ如來である。然るに十三佛は最も通俗を主とし世間普通に用ゐられてあるのに、何うして斯様に多く聞かぬ佛を加へたのであらうかといふに、十三佛曼荼羅は、總説の所でも既に述べた如く密敎最後の發達を示したもので、密敎の根本思想に依つて、胎藏界曼荼羅の十三大院にならうて組織したものであるから、虚空藏菩薩を中心として、修行の初位に釋迦如來を置き、修行の終位に阿

阿闍如來を置いたので、十三佛曼荼羅を縦に見る時は、修行成就の意を示して、茲に阿闍如來を配したのである。阿闍とは梵語に具さにアキシユビヤといひ譯して無動といふのである。『淨名經』に、

國あり妙喜と名づく佛を無動と號す、
とあるのは即ちこれで、『阿闍佛國經』には、

因位菩薩の行を修して、無諍三昧を得て、其の心無所著に住す、一切諸法の爲めに傾動せられず、故に阿闍と名づく。成佛して淨土を感得す、彼刹土の中には、惡趣及び煩惱なし、國土の人民好醜あることなし云々。

と説いてある。以て此の如來の妙功德は大方察せらるゝであらう。

阿闍如來の體相は、左の手を堅く握つて膝の上に置き、右の手を膝の側に垂れて、指頭を以て大地を壓して居る。阿闍如來は、金剛堅固の菩

提心を司り玉ふ佛で、一切衆生をして煩惱を除き、菩提を得せしめんとするの誓願があるのである。故に左の手を堅く握つて膝の上に置いてあるのは、一度菩提心を發したならば失はぬといふ、所謂堅固無動の精神を示したので、右の手を膝の側に垂れて大地を壓して居るのは、降魔の相を示したのである。密教の方ではこれを觸地の印といふさうだが、釋尊が菩提樹下に於て思惟工夫せられ、成道せんとした時に、種々なる惡魔が現はれて誘惑を試みた。時に釋尊が指頭を以て大地を壓されると大地の中から堅牢地神が出現して、釋尊の成道を證明し、惡魔を降服して最勝無上の大覺を成就せられたのである。故に今阿闍如來の示されてある觸地の印は、即ち此の意味に依つたものである。

吾々凡夫愚昧の淺ましきには、偶々菩提心を起すことがあつても、とすれば、迷ひの浮雲が、あたら眞如の明月を覆ひ、喜怒哀樂愛惡慾の七

情の爲めに折角發した菩提心も何時の間にやら消え失せて自ら苦患の淵に沈むやうなことになる。其所を左うはさせぬやうに守護して下さるのが阿闍如來の誓願である。されば常に此の阿闍如來を信仰して菩提心を捨離することの無いやうに、堅固無動の大精神を發揮し阿闍如來の無諍三昧に安住することが肝要である。

無諍三昧などいふと何か非常に六ヶしいことか知らぬか知らぬが決して左うではない。これに就いて思ひ出した人がよく知る塚原ト傳のことである。塚原ト傳が東國へ下つた時江州矢走の灣を乗合舟に乗つたことがある。時に舟中五六人の客あり中に年頃三十七八とも見ゆる男丈高く髯黒くして如何にも尊惡の相をしてるのが傍若無人の振舞をして大言壯語して居た。ト傳は初めは知らぬ振りして居睡りをして居たが、あまりの廣言を以て兵法の事を云々する

ので終に堪らなくなつて、ツト其の男の前に進み先刻より種々なる御物語面白く聞きました。其中で兵法の事はチト心得かねる。拙者も若年の頃から形の如く勉強したが、まだ人に勝たうとは思はない、たゞ人に負けぬやうに工夫する外はないと思ふが如何でござる。」といふと彼の男は、然らば貴殿の兵法は何流であるか。」と問ふ。「されば無手勝流でござる。」と答ふ。「ホオ、無手勝流とは面白、併し腰なる兩刀は何の爲めにするか。」これは以心傳心の兩刀で我慢の鋒を切り。惡念の萌すを斷つのである。「フーム、さらば一勝負所望だが必ず無手で勝てますか。」ト傳はニツコリして我が心の劍は活人劍であるが、對する人が惡人であれば忽ち殺人劍と變するのだ、といふた。彼の男は「さらば一勝負せん。」と甚だ立腹して、既に刀に手をかけんとする。ト傳は静かにこれを制して、「アイヤ暫く待たれよ、今こゝで勝負しては乗合の

人々に迷惑にならうであらう。萬一他人に怪我でもさせては相濟まぬ、
 依つて彼方の離れ島に到つて勝負せん彼所なれば無人の島故外に迷
 惑する人もあるまい。」といふと如何にも彼の島にてせん。」と彼の男
 もいふ。乃でト傳は船頭に命じて舟を離れ小島に着けさせた。着く
 が早いか彼の男は岸に飛び上り、スラリと一刀を抜いて、怒り顔さ
 まじく「サア来い、来い、と大音聲。ト傳は落ちつき拂つて、イヤ人に負け
 の無手勝流を御目にかけて、暫く待たれよ。」と言つて、腰なる刀を船頭
 に渡し、装を高くかゝげて、船頭より棹を借り、岸へ上るかと思ひの外、棹
 で、向ふの岸をウンと押したから、船はスル〜と岸を離れた。彼の男
 はこれを見て「ヤ、何故早く上つて来ぬか。」と怒鳴る。ト傳は耳にも
 かけず、船を沖へ漕ぎ出す。彼の男は狂氣の如くなつて「ヤ、逃げ
 るとは卑怯であらうぞ、返せ、返せ、サア尋常に勝負々々。」と呼び立てる。

スルトト傳はカラ〜と笑ひ、

「何にしにそれへ上るべきや、無手勝流とは此の事よ、如何に我が兵法の
 秘極を殊勝とは思はぬか、貴重なる生命を無益に捨てるやうな愚かな真
 似は眞平々々。所謂無手勝流の極意思ひ知つたか、さらば〜よ。」と
 後をも見ずに去つたといふ。當意即妙の明智感するに餘りあるとい
 ふべしである。これ即ちト傳の無諍三昧で、阿闍如來の無動堅固の活
 作略を示したものだといふべきである。

第十二 大日如來

大日如來は絶對唯一を顯すに暫く名づけたので、宇宙の本體を人格
 的の佛と見て稱したのである。梵語では摩訶毘盧遮那左坦他諶多と
 いひ、譯して摩訶は大毘盧遮那は遍一切處又は遍照、左坦他諶多は如來

といふ。今は毘盧遮那を遍照の義に依て、大日如來といふのである。密教の方では、時間空間に亘つて無限の宇宙其ものを直に大日如來とし大日如來の直接御説きになつたのが即ち密教で、其の他は皆な釋尊の方便説に過ぎぬといふので、所謂一切如來秘奥の教であるといふのである。故に大日如來は横から見れば宇宙の全體で、柳の緑なる花の紅なる其まゝ、大日如來の顯現にあらざるはなく、縦から見れば宇宙萬象發現の全體である。例へば水と波との如く、寄せては返す大浪小波、形は種々さまざまに異なれども其の全體は一つの水である。大浪小波の全體が其のまゝ、水で、其の波の起るもとはといへば矢張り水である。故に水は波浪の全部であり又波浪發現の全體で、而して波浪を總轄して居る所のものである。故に水即波波即水で、水と波とは不二不二なるものである。今大日如來も亦斯くの如く宇宙現象の全部が即

ち其まゝ、大日如來の顯現で、大日如來は宇宙の全體であり、宇宙現象の全部を總轄するものであるといふのが密教の所説である。されば大日如來は純密教の佛であることは勿論である。

宇宙の全體を現はすに、大日如來としたのは何故であるかといふに、弘法大師の所謂世間の淺名を以て、法性の深號を顯はしたので、日即ち太陽は吾々の知る所で最も大なるものである、故にこれを以て絶對を表示するの名としたのであるが、如何に太陽大なりと雖も、畢竟有限的物體に外ならぬから、直ちに取つて以て絶對唯一なりといふ事は出来ぬ。乃で大の字を冠して太陽は吾人の通常知る處では最も大なるものであるが、宇宙の全體は其れ所のものでないといふことを知らしむべく、大日として、其の無限絶對唯一の本性を發揮せしめたものである。故に『大日經疏』には、

世間の日も喩と爲すべからず、但だ其の少分相似を取るのみ、故に加ふるに大の名を以てす。

と言うてある。尙ほ同疏に、日といふこと説明するに三義を以てしてあるが、第一は除闇遍明とて闇黒を消除して光明を遍満ならしむるの義。第二は衆務成辨とて日光の偉大なる力に依て衆の務をそれく成し辯すること、即ち萬物の生々發育せしむるをいふ。第三は光無生滅とて日光には生滅の無いこと、即ちたとへ一時其の光は雲に蔽はれることがあつても、決して光其の物が滅したといふ譯ではない、雲の彼方には依然として常住不變に輝き照して居るといふ義である。かく廣大なる日も未だ喩とするに足らぬから、其上に更に大といふ形容詞を添へて有限の最大なるものから漸次無限絶對の大を想像せしむるべく大日と稱したのである。

かく宇宙法界に遍満せる萬物發源の本體を人格的に見て、大日如來と名づけたのであるから、峯の松風谷の流れも、皆なこれ大日如來の説法度生の聲ならざるはなく、草木國土悉皆大日如來の顯現でないものはない。諸佛諸菩薩といふも、畢竟大日如來の一分身一眷屬で、路傍の犬の糞も亦これ大日如來の一分身であつて、自ら法界遍滿の光明赫々たるを認むべきである。されば大日如來の體相は通常頭には五智の寶冠を戴き手に智拳印を結んで居られるが、實は不可説不可商量の身相にして諸佛の一切智一切徳を完備し玉へる諸佛總體の佛なることは勿論である。

さて大日如來のことは略了解が出来たであらうが、然らば此の無限絶對の大日如來、而も密教では唯一の主尊とする大日如來を、何故十三佛曼荼羅の第十二番目に配したので有かといふに、此十三佛曼荼羅は

虚空藏菩薩を主尊として組織し、所謂密教の人生觀を示したものである。眞の人生觀を得るには眞の宇宙觀即ち宇宙の絶對無限なることを認識してゐなければ得られぬは、當然である。故に眞の虚空藏菩薩を知り眞の人生觀を得るには、先づ無限絶對なる大日如來を知り眞の宇宙觀を得てからでなければならぬから、眞の虚空藏菩薩を知らしめる爲めに、第十二番目に大日如來を置き、次に虚空藏菩薩を置いたのである。されば無限絶對の大日如來を通過して眺めた所の虚空藏菩薩は自ら無限絶對であることは明白なることである。故に此の理に依つて大日如來を第十二番目に置いたのである。

昔江戸大傳馬町に、佐久間勘解由といふ者があつて、其の下婢にお竹というて頗る慈善心に富んで居る女があつた。日々自分の食物を惜氣もなく乞食共に與へて、自分は水盤の流れ口に小さい籠を結び付け

て置いて洗ひ流した飯粒をこれに受けて、常にそれを食べて美味しうして舌鼓を打つて居た。到ても尋常の人の眞似が出来ないことを當然のこのやうにして、少しも苦にせず、只だ、慈善に心を盡して居たのである。されば主人を始め一家一同、お竹の行ひに感心して、永く召使うて居たが、數年の後、病んで主人の家に没した。時に水盤の流し口から、光明が赫々と耀いたので、人皆なお竹の徳を賞揚したこのことである。斯様なことは、今時の人々に信せられぬか知らぬが、敢て奇怪でも不思議でも無いことで、お竹の心掛けを褒めたものであらうか、又お竹の平生から見れば、それ位のことにはあるべき筈である。大日如來の信仰から見れば、たとへば屑米一粒でも、人參牛蒡の切屑でも皆なこれ大日如來の顯現、大日如來の一分の徳は具はつて居るのであるから、其心を以て眺むれば、實に大日如來の光明赫々たるものがあるのは、蓋

し當然である。故に世の下女等も宜しくお竹に習うて物を粗末にせず如何なる物に對しても敬愛の念を以て取扱ふべきである。さて此事がいよゝ世間の評判となりて其の水盤を所望するものが頗る多かつたが後ち轉々して遂に芝増上寺の別院なる心光院の寶藏に保存することゝなつたといふ。これがお竹大日如來の由來であるとのことである。

第十三 虚空藏菩薩

虚空藏菩薩は前にも數々述べた如く、十三佛曼荼羅の主尊である。勿論十三佛の各佛各尊皆一々萬德圓滿の佛で、敢て輕重深淺尊卑高下の別はないのであるが、暫く縦に次第順序して見れば、これまで述べた所の十二佛は、今述ぶる所の虚空藏菩薩の説明の楷梯ともいふべきも

ので、此の虚空藏菩薩を説く爲めに、十二佛を説いた様なものである。乃で先づ其の名義より釋すれば、虚空とは、今日言ふ所の宇宙のことで、廣大無邊を義とするのである。佛書の中には廣大無邊なることを説くに「猶ほし虚空の如し」と言ふてあるが、只だ廣大無邊といふても吾々の想像には一寸浮びかねるから、喩へば虚空のやうだといふのである。今此の菩薩の名稱が即ちそれで、無限絶對唯一廣大無邊なるを喩へて虚空といふたのである。藏とは含藏の義で、虚空はよく一切萬物を含藏して餘す所がない、今此菩薩の眞智妙徳も亦復是の如く、一切を含藏して廣大無邊なるものであるといふ所から、虚空藏菩薩と稱したのである。故に虚空藏菩薩は絶對唯一の宇宙の本體を人格化した所の大日如來を、更に現實に引き寄せて其の活動を人格と見て佛としたものである。されば虚空藏菩薩は、理想と現實とを調和して、これを形の上

に現はしたもので、一切衆生に理想の智慧と現實の福德を與へて盡く
 ることなきこと、恰も虚空の萬物を含藏して盡くすることなきが如し
 あるといふ意味で、虚空藏菩薩といふたものである。故に其の體相は
 右の手に決斷決擇の智慧の利劍を持ち、左の手に福德の如意寶珠を
 持つて居られる。これ即ち衆生の願望に應じて智慧を授け福德を與
 ふるの意を示したものである。而して智福施與を成就し玉ふ爲めに
 十波羅密菩薩を眷屬として居られる。即ち第一檀那波羅密菩薩、第二
 持戒波羅密菩薩、第三忍辱波羅密菩薩、第四精進波羅密菩薩、第五禪定波
 羅密菩薩、第六般若波羅密菩薩、第七方便波羅密菩薩、第八誓願波羅密菩
 薩、第九力用波羅密菩薩、第十智慧波羅密菩薩である。斯ういふと、如何
 にも虚空藏菩薩が、十人の菩薩を眷屬として、常に左右に従へて居られ
 るやうであるが、畢竟虚空藏菩薩の具備し玉へる諸徳を人格化したも

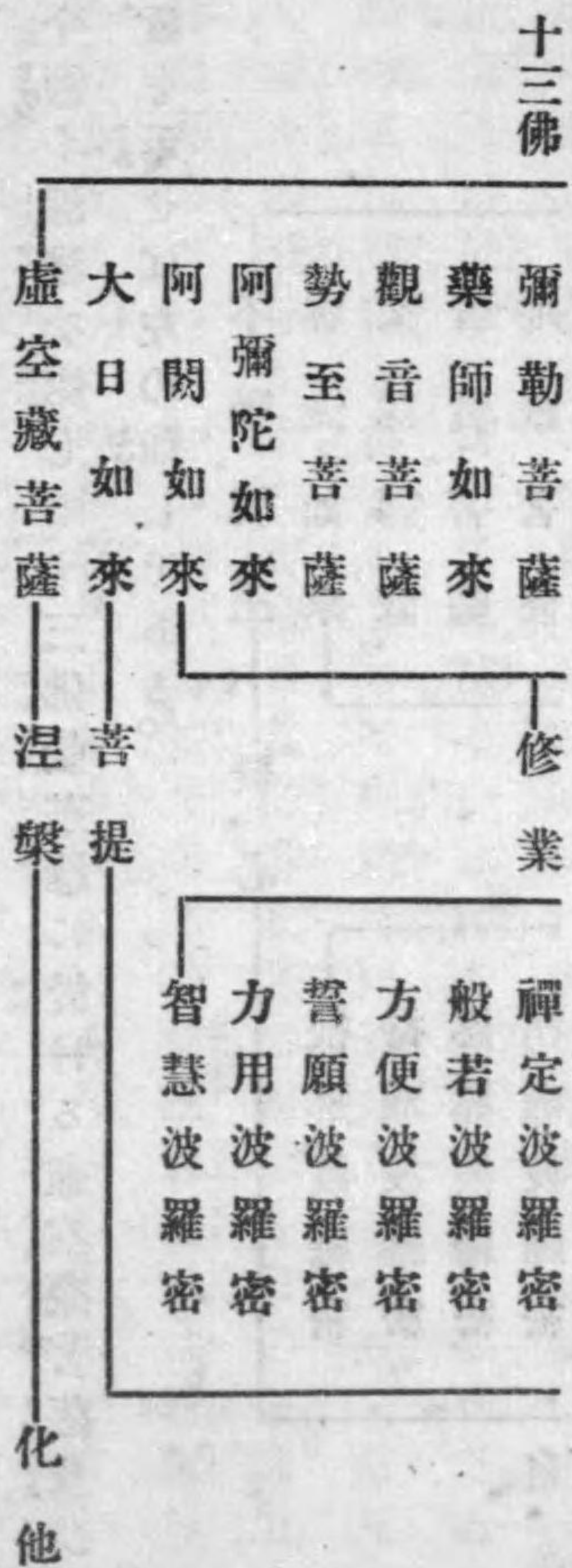
ので、波羅密とは梵語で、譯して度又は到彼岸といふ。即ち現實迷妄の
 此の岸より理想妙覺の彼岸に到る、或は此の岸から彼岸へ度ると
 いふ意味なのである。されば虚空藏菩薩が此十波羅密菩薩を眷屬と
 して、一切衆生に智福を授け玉ふといふのは、要するに一切衆生が十波
 羅密を修し、其の徳を具ふれば、自ら智福圓滿の虚空藏菩薩となること
 が出来るのである。故に虚空藏菩薩を信仰するには、先づ此の心掛け
 が肝要である。

虚空藏菩薩には、斯くの如く甚深微妙の玄理が含まれてあるのであ
 るが、今は其の眞意義を發揮しないで、一般に智慧を貰ひ、幸福を祈るた
 めに尊崇せられ、最も幸福の方に重に信仰せられて居るのである。そ
 れは菩薩が左の手にせる福德の如意寶珠から、無限に福德を授けられ
 るものとの考へがあるからであらう。

因に十波羅密の一事を一寸説明すれば、波羅密とは既に述べたが、第一檀那とは梵語で譯して布施といふ、即ち博愛慈善の事である。第二持戒とは戒律を持つ事、佛敎では五戒八戒十戒二百五十戒など、種々の戒律があるが、戒とは防非止惡の義で、今日の言葉で言へば規律を嚴守するといふのが持戒である。第三忍辱とは所謂なる堪忍は誰れもする、ならぬ堪忍するが堪忍といふならぬ堪忍をすることである。第四精進とは精はクハシク進はス、ムと讀む字で、クハシクス、ム即ち刻苦勉勵するの意。第五禪定とは禪は梵語の禪那の略で譯して靜慮といふ所謂靜かに思考すること。第六般若とは、梵語譯して智慧といふ。併し猿智慧や惡智慧で無いことは勿論である。第七方便とは、決して嘘ではなく、眞實の道を説く手段方法として假りに説くが如きを方便といふ、所謂機智機略ともいふべきもの。第八誓願とは

彌陀の四十八願や藥師の十二願等の如く所謂願望希望のこと。第九力用とは、力に種々の力があつて、今日では力學とて一の科學として研究せられてもあるが、こゝでは心の威力のことである。第十智慧とは第六の般若と同じやうであるが、こゝでは最極至妙の眞實智をいふのである。虚空藏菩薩は實に此の十種の徳を完全に具備せられて衆生に智福を授け玉ふことは前に述べた通りである。今暫く深淺次第して、十三佛曼荼羅に於ける虚空藏菩薩及び各佛の位置を示せば左の如しである。





第三章 結 辭

以上は十三佛曼荼羅の大體と各佛の名義誓願功德等をザツと述べたのであるが、不才其深意を盡す能はず、淺學其の秘義を詳にすること能はざるは、頗る遺憾とする所である。讀者幸にこれに依つて臆氣な

がらも十三佛曼荼羅の深意の一分を知り、各佛の秘義を覺り、以て虚空藏菩薩の唯一絶對の理を幾分了解することが出来たならば、宜しく虚空藏菩薩の十波羅密を修業し、其妙徳を一身に聚めて、自己の唯一絶對なるを覺り、虚空藏菩薩の大誓願を發揮し、智福圓滿を成就して、大なる自己の存在を明かにし、社會國家の爲めに活動すべしである。『文殊五字陀羅尼頌』には、

我れ若し一念を起して我は是れ凡夫なりといは、三世諸佛を誘するに同じ、法に於て重罪を結す。
と誠められてあるから、自己を迷妄の凡夫なりと卑下せず飽まで自己を尊重崇拝すべきである。徒らに虚空藏菩薩を客觀視して、猥りに隨喜渴仰し、禮拜讚歎した所で、其の利益を被り、智福を授けられるといふことは到底覺束ないことである。

昔或湯屋で、大黒様を信仰して、大さう有福になつた者があつた。スルトこれを見た貧乏者の横着者が、アノ湯屋の大黒様は實に靈驗の顯著なものである、俺も斯う貧乏では實にやりきれないから、一つアノ大黒様を盗んで来て、イヤ盗むといふては悪いから、ソツト黙つて借りて来て大いに信仰して見やう、左うしたらチツトは生活が樂になるだらうと途方も無い考ひを起して、或日密かに其の大黒様を無断で持つて来て、占めたくと大喜び早速神棚へ安置し朝から晩まで家業などはソツチ除けにして、今までとても碌に仕事をしないのが、今度一層仕事に手を出さず、只だ大黒様へ燈明を上げたりなごして、南無大黒尊天願くは金銀財寶をドツサリ澤山授け玉へ、寝て居て氣樂に暮せるやうに何うぞ福德を恵み玉へ。」と都合のよい慾張つた願ひをして、虫のよいことを祈つて居た。けれども幾日経つても貧乏は益々はげしくなれ

ばどて金の生る木が生へるでもなければ、又金貨や銀貨がヒョッコリ地から湧いて出もせぬ、風の吹きまはしで、紙幣がヒラ／＼と飛んで来るやうなこともない。さてこんな筈はないがど一生懸命に祈つたが遂に其の靈驗聊かも見はれず貧乏は日一日と甚しく、果ては着て居る着物までも脱がねばならぬやうになつた。乃で或日大黒様に向ひ「これ程までに信仰して居るのに、少つとも福を興へぬとは何事ぞ、アンマリ聞えませぬ大黒様と怨みまじりの愚痴を言ひ、俺が斯うして貧乏で困るから斯んなに祈つて居るのに、全體此の先き何うしてくれるのか、裸體になつて了ふぢやないかと手前勝手のことを言ふて談判に及ぶと、大黒様はニッコリして、「イヤそれはお前の心得方が違ふ、私はもど湯屋に居たので裸體にするのが商賣だから喃。」といふたこのことである。これは一種の笑話に過ぎぬけれども、間違つた信仰は斯うした憂

目を見ること、蓋し當然である。世には「叶はぬ時の神頼み」といふことがあるが、叶はぬ時や困る時にはばかり、苦しまぎれに神佛に祈つた所でオイソレと靈驗利益のあるべき筈はない。されば十三佛を信仰するに就いても、よく／＼此の道理を辨へて自己の尊嚴を自覺し、虚空藏菩薩の十徳を具へて、完全に自己の成立をなすことが最も肝要である。

十三佛眞言

不動明王

なうまくさんまんだばざらだん、せんだまかろしやだ、そはたや、うんたらたかまん。

釋迦如來

なうまくさんまんだばだなんばく。

文殊菩薩

おん、あらはしやなう。

普賢菩薩

おん、さんまや、さどばん。

地藏菩薩

おん、かかかびさんまえい、そわか。

藥師如來

おん、ころく、せんだん、またうぎ、そわか。

觀音菩薩

おん、あろりきや、そわか。

勢至菩薩

おん、さんさんさく、そわか。

十六善神由來

十三佛講話

阿彌陀如來

おん、あみりた、ていせい、から、うん。

阿閼如來

おん、あきしゆびや、うん。

大日如來

おん、あびらうんけん。(胎藏界)

おん、ばさらだどばん。(金剛界)

虚空藏菩薩

なうぼ、あきやしや、きやらばや、おん、ありきや、まりほうそわか。

布教資料 十三佛講話(終)

十六善神由來

十三佛講話

阿彌陀如來

おん、あみりた、ていせい、から、うん。

阿閼如來

おん、あきしゆびや、うん。

大日如來

おん、あびらうんけん。(胎藏界)

おん、ばさらだどばん。(金剛界)

虚空藏菩薩

なうば、あきやしや、きやらばや、おん、ありきや、まりぼうそわか。

資料 布教 十三佛講話 (終)

十六善神由來

十六善神由來

第一章 緒言

佛法には八萬四千の法門あり、これを文字に綴り、文章に現はしたものを一切經又は大藏經と言うて、五千餘卷の經文がある。釋迦牟尼如來御一代の教説は、皆な此の中に收められてあるので、頗る廣大なものであるから、これを一々説明するといふのは容易の業ではない。一切經をたゞ一通り讀む丈けでも、多くの歲月を要するは勿論である。故にこれを端から讀んで説明するといふやうなことをして居ては、一生涯經つても佛法の何物たるかを知らぬうちに早やくも此の世をおさらばといふやうにならぬとも、限らぬ。實に多岐多端の法門一寸考へ

てはドコから手をつけてよいか分らぬ位である。けれどもこれは一應表面の觀察で其の根本原理、即ち釋尊の眞精神に至つては、決して多様あるのではない。八萬四千の法門、五千餘卷の經文といふのも、畢竟應病與藥の方便説で歸する處は唯一絶對の眞理を示すべく、一切衆生の機類に應じて導いたに過ぎぬのである。故に『法華經』には、

唯一乘法、無二亦無三

と説き、又『維摩經』には、

佛以一音演説法、衆生隨類各得解

と説いてあつて、即ち佛の教は唯だ一乘法あるのみで、二も無く亦三も無いので、佛が一音を以て法門を演説するに衆生は各々其の機根に隨つて相當の了解を爲し、分れて八萬四千ともなつたのである。例へば今茲に一人あつて、忠實業に服し、勤儉産を治め。」と説くに、これを聽く

もの士農工商或は男女老幼に依りて、各々其了解する處が多少異なる處があつても、歸する處は「忠實業に服し、勤儉産を治め」るに外ならぬのである。されば佛法八萬四千の法門も、詮じつめれば眞俗二諦の法門に攝することが出来るのである。眞諦門といふのは、絶對的方面をいひ所謂無差別平等の理を示し、俗諦門とは、相對的方面で差別不平等を明すのである。斯ういふと眞諦と俗諦と二つ別なものが並んであるやうであるが、眞理は決して二つあるものではなく、眞諦といひ俗諦といふのも、ツマリ眞理の兩方面に過ぎぬので、一枚の紙の表裏の如きものである。故に眞諦俗諦は全く不一非異の關係で、暫く俗諦門から眺めれば、千差萬別であるが、翻つて眞諦門から觀れば、千差萬別其まゝに平等無差別である。此の理を縦横に説き明したのが、開いて八萬四千の法門となり、五千有餘の經卷となつたのである。

さて此の一切經中に最も大部の經文で、大般若といふのがある。其の卷數は實に六百卷、二百六十五品に分ち、一千二百五十七の義門を開いて示されたもので、或る閑人が文字の數を計へて見たら、六十億四千萬あつたことであるが、釋尊が此經を説かせらるゝに、二十二年間を費したといふ。或は十四年間といふ説もあるが、兎に角大部の經文で、釋尊四十五年間の説法中半は此經の爲めに費されたともいふべきである。此大説法は、悉く佛の御悟りを示されたもので、眞俗二諦の上からいへば眞諦門の説で諸法皆空、一切即空の道理を示されたものである。故に佛法に於て御祈禱をする時には、大低皆な大般若の轉讀を以てする。而して大般若轉讀の時には、必ず「十六善神」を御本尊とするのである。これは全體何故であるか。平生は御釋迦様や、藥師様、或は觀音様などを本尊として禮拜して居る寺院でも、いざ大般若轉讀といふ

時には、必ず十六善神の掛物をかけて、恭敬禮拜するを常とするのである。十六善神、或は十六神王ともいひ、十六善神王ともいふが、兎に角神王とか善神とかいふ以上は神様に相違ないは勿論である。所が十六善神の繪姿を拜見すると何れも鬼のやうな怖ろしい相貌をして居られる、何うして斯ういふ怖ろしい神様が、大般若の御本尊として祀れるのであらうか、と知らぬ者は不思議に思ふであらう。それで前に亡者の追善供養の本尊たる十三佛の由来を話したから、こゝで現世祈禱の本尊たる十六善神の由来功德を述べ、併せて大般若經が御祈禱に御利益のあるの所以を述べて見やうと思ふ。

第二章 十六善神の名義と體相

十六善神とは『諸宗佛像圖繪』に依ると、

十六善神由来

勇猛心地善神

增益善神

毘盧博叉善神

歡喜善神

吠室羅廊善神

拔除罪垢善神

多門天

師威猛善神

能忍善神

除一切障難善神

降伏毒害善神

毘盧婆忍善神

離一切怖畏善神

提頭賴吒善神

攝伏諸魔善神

毘盧勒叉善神

と並べてあるが『大般若經』の頭首には

提頭賴吒神王

迦毘嚩神王

阿彌陀神王

婆娑嚩神王

真陀嚩神王

禁毘嚩神王

畔闍嚩神王

沙彌嚩神王

摩休嚩神王

跋陀徒嚩神王

跋折嚩神王

鈍徒嚩神王

印陀嚩神王

鳩嚩嚩神王

毘迦嚩神王

俱鞞嚩神王

と書き並べてあつて、通常大般若轉讀の際に禮拜するには此の順序に依つて唱禮して居る。所が元來印度の神様であるから、妙なお名前前で、一寸記憶し難いが、それかといつて今更ら改名届する程でもないから、先づこれはこれとして置くが、それにしても、十六善神の御掛物を見て、も、何れが提頭賴吒神王で、何れが禁毘嚩神王やら、サツパリ分らないで、は、致方が無いから、其の體相を示せば

提頭賴吒神王は綠色で手に刀を持つて御座る

禁毘嚩神王は青赤色で手に大刀

跋折嚩神王は白青色で手に劍

迦毘嚩神王は青色で手に釵

畔闍嚩神王は赤白色で手に獨鈷

鈍徒毘神王は 黄赤色で手に螺
 阿彌嚩神王は 赤色で手に箭
 娑彌嚩神王は 黒赤で手に寶珠
 印陀嚩神王は 白色で手に鉾
 婆姨嚩神王は 肉色で手に弓矢
 摩休嚩神王は 青白で手に斧
 鳩毘嚩神王は 赤肉で手に寶棒
 眞陀嚩神王は 黒肉で手に五鈷
 跋陀嚩神王は 綠赤で手に白拂
 毘迦嚩神王は 黄緑で手に三鈷
 俱鞞嚩神王は 青黒で手で戟を持つて御座る
 と「般若守護十六神王形體」といふ本に説明してある。これは支那の眞

言宗の高僧金剛智三藏の譯したもので、『大藏經』の密部の中にあるので、
 十六善神のこゝを書いたものは、此の一卷しか無いが、これに依りて、略
 々十六善神の一々を見分けることが出来るであらう。併し其の持物
 の中でも誰れにも直ぐ分るものもあるが、中には獨鈷、五鈷、三鈷の如きや、
 又大刀、刀、劔などは素人には一寸分り難い、又其の御顔色に就ても、青白
 色と白青色とは何ういふ相違があるのかと仔細に調べたら、普通の繪
 畫きでもこれは見分け難いであらうが、併し色と持物とを能く注意し
 て御繪像に引き合せて見たならば、大凡見分けることが出来るであら
 う。

第三章 十六善神の起原

さて十六善神の名義と體相とのことは、一應了解することが出来た

であらうが、然らば此の十六善神は、何時頃から世に信仰せられるやうになつたのであるか、勿論大般若經守護の神様であるといふのだから、佛法の神様には相違ないが、佛法の本家本元たる印度に起原するか、支那か日本かといふに、お名前前に依つて考ふるも、其原籍地は印度にあることは勿論であるが、今日一般に流布し信仰せられて居る十六善神の御繪像の完全に出來上つたのは支那に於てである。或はいふ、十六善神の御繪像は釋尊が大般若經をお説きになる時の有様を畫いたもので、印度から支那に傳はつたものであるなど、説くものもあるが、一聞全く噴飯の至りで、一向根據のない説である。成程十六善神といふ神様は印度の神様に相違ないから、これは印度から支那に傳はり、續いて日本に傳はつて信仰尊崇せられて居るのであるといふのは一應尤もの話だが、今日傳はつて居る御繪像が印度に出來たものとは受取かね

る。それは一寸御繪像を見れば直ぐ解る。一口に十六善神といふけれども、實際お掛物には、十六善神以外の菩薩法師などまで畫いてあるではないか、然かもこれ等は釋尊が大般若經説法の會座には少しも關係のないものである。先づ御繪像に就て調べて見ると、

中央が教主釋迦牟尼佛、其下の右が文珠菩薩、左が普賢菩薩又其下の右が常啼菩薩、左が法涌菩薩、尚ほ其下の右には玄奘三藏法師、左には塵沙大王、而して玄奘三藏法師には一人のお小僧が隨つて居る、これは玄奘三藏の侍者で、これ等佛菩薩を中央として、其兩側に列んで居るのが即ち十六善神である。

これが所謂十六善神の御繪像で、實は一佛十六善神四菩薩一王一法師一小僧の都合廿四體を一團として畫いたものである。さればこれを以て大般若經説法の模様だなどは何うしても受取れぬ。大般若經

はコンナ少數の者の爲めにお説きになつたものではない。種々なる階級の人々が澤山聴聞して居たに相違なく、十六善神も其聴衆の一部分に加はつて居たものであらうから、これを以て直ぐに大般若説法の有様であるとするのは間違つて居る。其證據には、御繪像の中に大般若經が印度から支那へ傳はる時の出來事などが加へられてある。即ち塵沙大王や玄奘三藏などがそれで、玄奘三藏が求法の爲め印度に入つたのは釋尊の滅後一千年も経てからのことである。シテ見れば、誰が考へても一千年の後の人が、一千年前の説法聴聞に加はつて居たとは思はれぬであらう。故に此の御繪像は印度で出來たものではなく、無論大般若經説法の模様を書いたものでないことは明らかである。即ち此の御繪像は、支那の唐の世の第五代の皇帝たる玄宗皇帝開元七年に金剛智三藏といふ高德のお方が、密教を傳へやうとて、印度から支

那へ來られたので、皇帝が詔を下して十六善神の形體を書かしめ、彩色をさせたのが、今日傳はつて居る十六善神の起原であるといふことである。それでこそ御繪像の中に、大般若經が支那へ傳はるに就て最も關係の深い常啼法涌の二菩薩や、塵沙大王、玄奘三藏法師などの加へられたのも成程と首肯るのである。(これ等のことは後に説明する) されば十六善神は始めは密教の方で傳へて居たので、これが日本に傳はつたのも矢張り密教者の手に依つてゐる。即ち眞言宗の開祖弘法大師が入唐して、これを師匠から受け、日本に傳來したのが、我が國に於ける最初の十六善神であることである。其後密教が盛んになるに従つて、大般若の御祈禱が盛んになり、それと共に十六善神も非常に尊崇信仰せられて、今日では到る所の寺々で、一部の大般若經を備へて置かぬは無い位で、従つて十六善神の尊信も盛んである。殊に教

外別傳不立文字を旨とし、即心是佛と唱へて居る禪宗に於ても、亦大般若轉讀を行ひ十六善神を信仰して居るのである。

第四章 十六善神と大般若經

大般若經は前にも述べた如く、全部六百卷、一切經中最大部の經文である。具さには大般若波羅密多經といふので、大とは梵語の摩訶を譯したものの般若波羅密多是梵語でこれを譯すと般若は智慧、波羅密多是度又は彼岸到といふのであるから、實は摩訶般若波羅密多經といふべきであるのを、通常略して大般若經又は大般若と稱するのである。龍樹菩薩は此の大般若のことを論じて、『大智度論』といふのを作られたが、全部一百卷ある。尤も原本が六百卷もあるのだから、これを論じては一百卷位の大部になるは當然のことであるが、以て大般若經の如何に

大部であるかといふことが知れるではないか。釋尊はこれをお説きになるに二十二年も費したといふ、或は十四ケ年ともいふが、イクラ短く積つても兎に角十年以上はかかつたことであらうと思はれる、それ丈け尊い難有い大般若の法門をお説きなされた時には、定めし多く聽衆がつめかけて熱心に聽いたことであらう。菩薩や阿羅漢はいふまでもなく、梵天帝釋四大天王、或は天界人界の有ゆる人々等、實に無量無數にして、數へきれぬ程の聽衆があつたと經文に示されてあるが、實に左うであつたであらう。時に十六善神達も其席に列つて聽聞して居たのであつた。『般若大心經』の中に此のことを説いて、
十六藥叉王と與に各々七千の諸の鬼神等を率て云々。とあるから、十六善神は各々七千人宛の眷屬を引きつれて、大般若聽聞の衆の一分部として加はつて居たことは明らかである。十六善神が各々七千人

を引き連れたとすれば、其の人数だけでも合計十一萬二千人であるから實に大般若説法の會座は如何に多くの聽衆があつて、如何に釋尊の御徳が廣大であつたかといふことが察せられるではないか。斯ういふことをいふと兎角世間には批難する者もあつて、トテもそれだけの大衆に向つて説法の出来るべき筈がないなど、理屈をいふものもあるが、實際お經の中には、敢て大般若の會座のみに限らず、時々斯ういふ事が記されてあるのだが、たゞ文字の表面から観ては成程不思議にも思はれるけれども、格別目に角立て、理屈をいふ程のことでもあるまい。禪録の中に「一塵を立すれば家國興盛し、一塵を立せざれば家國衰亡す」といふ語があるが、理屈屋連中はこれ等を何と説明するか。思つてこゝに至れば、釋尊説法の會座の聽衆が無量無數であつたといふたからとて、左まで驚く程のことでもあるまいし、又左様のことは事實

あり得べからざることであるなど、力んで強いてこれを否定する程のことでもあるまい。

餘談はさて置いて、兎に角大般若説法の會座は頗る盛んなもので、十六善神の眷屬ばかりでも十一萬二千人からの聽衆があつたといふことであるが、此十六善神とは全體何ういふお方であるかといふに、實は夜叉羅刹というて鬼神なのである。さればこそ御繪像を見るに、ドノ神様も皆な猛惡なる相貌をして居て、見るからにゾツとするやうな怖しいお方ばかりであるのである。世間の諺にも

外面如菩薩、内心如夜叉

というて、心の怖い根性の悪い者のことに使つてあるが、實際菩薩といへば、如何にも柔和な美しいお方であるが、夜叉といふのは、ゾツとする程怖しい鬼である。小野小町の再來か、照手姫の現前か、或は天女の

天降れるかと思ふやうな美しい女が、聞くも怖しいやうな悪事を働くなどは、即ち外面如菩薩、内心如夜叉である。然るに今此の十六善神は、見かけは怖しい夜叉であるけれども、其の内心は大般若守護の神様で全く外面如夜叉、内心如菩薩であるのである。然らば何故斯様に怖しい姿をして居られるのであるかといふに、これは前にも述べた如くもとは實際夜叉であつたのであるから仕方がない。「夜叉とは具さに夜叉又羅刹といひ、譯して捷疾可畏といふ」と『翻譯名義集』に説明してあるが捷疾といふのだからスバヤク而して可畏とオソロシイ者で、悪鬼の總名であるとのことである。「此等の諸鬼は、多く海島に居り、或は砂磧に住し、人間に飛行し、能く美妙容儀を變じて、人を惑はし詐つて相親輔し方便誑惑して之れを啖ふ」と『慧琳音義』といふ書に説いてあるが、即ち人を誑して食ふといふ恐ろしい鬼である。斯う文字通りに解釋して見

ると如何にも奇妙な恐ろしいものであるが、能く考へて見ると、斯うした鬼共は敢て海邊や河邊にのみ住むのではなく、現在今の世の中には、到る處に澤山ウヂヤ／＼して居て、花の都の真中にも、白晝出沒横行して居るではあるまいか。人を欺き人を惑はして、人の生血を吸ひ、骨を噛み、而して自ら腹を肥して喜んで居るが如きは、其顔形こそ人間に似て居れ、心は全く悪鬼夜叉といふべきである。新聞の三面記事の多くは、人間界の夜叉的行爲の報道である、實に歎かばしい次第ではないか。斯くも怖ろしい悪鬼、方便誑惑といろ／＼手段方法を廻らして、人を誑して啖ふといふ夜叉羅刹の十六人が大般若の御祈禱の時には、善神として祀られるのは、一寸考へては如何にも奇異である。何故に此十六悪鬼が十六善神として祀られ尊敬せられるのであるかとは、誰れしも一寸疑ひを起す所であらうが、これは外でもない、これ程怖ろしい悪

鬼も釋尊の大般若説法の會座に列つて、甚深微妙の法門を聽聞したの
 で、つくづく自分達の今まで持つて居た心掛の悪いことを悟り、忽然發
 露懺悔して惡念去つて善心生じ、たゞ大般若の功德の有難さに人
 を欺ますの、困らすの、啖うて骨までシャブルのといふやうな考ひは
 サラリと消滅つたばかりでなく、大いに力を盡して大般若を守護し佛
 様の御手傳ひをして出來得る限り大般若護持の衆生を守護致さう、未
 來幾千萬年の後までも大般若のある所には、必ず現前して大般若受持
 の人の爲めに幸福あらしむべく力を振つて大いに盡さうと決心した
 ののである。是に於て惡鬼忽ち變じて善神となり、さてこそ大般若の本
 尊として尊敬せらるゝやうになつたのである。諺にも、
 惡に強ければ善にも強い、
 といふが、實際敵として向ふへ廻はして、手應のある程の奴でなければ

味方として頼母しくはない。沈香も焚かず屁もヒラすといふやうな
 のは談ずるに足らぬ時には沈香も焚くべし、屁もヒルべき所に於ては
 大いにヒルべしである。人前を兼ねてのスカシツ屁などは、第一衛生
 上にも甚だ能くないし、臭氣は一層甚だしい。思ひ切つて屁をヒル程
 の勇氣のもので無ければ、とても沈香は焚き得ないから駄目だ。十六
 善神が初め十六惡鬼として、非常に畏しいものであつたが、大般若を聽
 聞して、其の功德により、豁然開悟の曉には、最も尊敬すべき善神として、
 大般若の爲めに偉大なる働きを爲し信仰の衆生に廣大なる利益功德
 を與ふるといふのも、實にさこそ思ひやらるゝではないか。
 惡鬼といひ善神といふも、よくよく調べて見ると、實は彼方にあるの
 では無くて、此方の心の中にあるのである。譬へばモルヒネの如き大
 劇薬は、一寸嘗めても一命を失ふ程の毒であるけれども、病の種類に依

つては、これで無ければ癒らぬといふのもある。さすれば毒薬といひ良薬といふも、モルヒネ其物にあらずして、其用方如何に依るのではないか。又彼の火や水の如きは、我々が日常生活上、無くて叶はぬ大切なものであるが、一朝間違へば、生命財産をも一時に奪ひ去るの大災害を来すではないか。釋尊も『華嚴經』の中に

牛水を呑めば乳となり、蛇水を呑めば毒となる、と仰せられてある。水に變りはなければ、呑むものに依つて毒ともなれば、滋養の乳ともなる。巴豆といひ附子といふが如き大毒物も、用方に依つては皆なこれ大良薬である。障礎の悪鬼、夜叉、羅刹も、本地は即ち大善神。大醫者、婆の眼から見れば、盡大地の草木悉く保命の靈薬ならぬはなく、大悲佛陀が教を垂るれば、遍界の悪鬼も護法の善神とならぬは無いのである。熱湯に著すれば、氷は實に怨敵なるべきも、氷に著すれば、熱湯は即ち怨

敵、然かも達観すれば、氷も熱湯も元是れ一の水に外ならぬ、怨親平等、愛憎不二。

わがよきに人の悪しきは無きものぞ
人の悪しきはわが悪しきなり

とは此の道理である。

昔常陸國江戸崎といふ所に、鍋屋某といふ者があつた。妻を迎へた所が何うも姑と妻との折合が悪くて、始終家内に風波の絶え間がないので、亭主は大いに心配して居たが、或日つくくと考へて、方便を廻らし、妻を潜かに物蔭へ呼んで、
「何うも斯う毎日のやうに家内中物言ひの絶えないのは、誠に心苦しい次第であるが、平生よくく様子を見て居るのに、如何にも私の母が悪いのだ、お前は素直によく仕へて呉れるが、母の根性がヒネクレて居る

からアノ始末實にお前には氣の毒でならぬ。乃で私は一層一思ひに母を裏の池へ突き落して殺して了はふと思ふ。」といふと、妻はさも嬉しげに、

「それはよい所へ氣が付きました、何うぞ左うして下さい、左うすれば妾もホントに安心することが出来ます。」といふ。鬼といふか蛇といふか實に恐ろしい嫁の心。

そこで亭主は言葉を改めて、

「併し諺にも人の口には戸は立てられぬと言うて、兎角人の口は塞ぎ難いものであるから、今急に殺したら、キツト世間では、お前が平生仲が悪から殺したのだらうと噂をされぬとも限らぬ。そこでお前は辛からうが、暫くの辛棒と思つて、廿日ばかり孝行の真似をして呉れ、何でも母のいふことをハイ／＼と氣に入らぬことがあつても、言葉返しや膨

れ面などしないで、母の言ふなりに仕へて呉れ、

いぶくとも後は寝安き蚊やりかな、

母を殺してさへ了へば此方のものだから、少しの間の辛棒だ、何うだいで出来るだらうね。其うちに私が何とかして母を誘ひ出してコツツリ殺す、さうすれば世間の人も流石の鬼婆も嫁の孝行に愧ぢ入つて、到々池に身を投げて死んだといふであらう。左様なれば占めたものだ、心まかせ勝手氣まゝに暮らせるといふものだ。」といふと、「エ宜うございます、貴郎が左ういふ風にしてキツトお母さんを殺して下さるなら、二十日が三十日でも何んな辛らいことがあつても、キツト辛棒してよく仕へますから、何うぞ約束を違へて下さるな。」と念を押す、何處までも恐ろしい嫁の心根。

斯うと相談が極つてからは、全然で生れ變つたやうな嫁の孝行振り

其の心根は兎に角に、表面は柔しくハイと仕へるので、もとより岩木ならぬ姑の心も次第に和らぎ、これまた生れ變つたやうに柔しくなり生みの娘のやうに嫁を大切ににするやうになつたから、家内はいつも春風の吹き渡るやうに長閑であつた。これが所謂嘘から出た實と言ふのか、嫁と姑の仲のよいこと他處の見る目も心地よい程となつた。亭主は此様子を見て一日妻を呼び、

「お前も随分辛らかつたであらうが、よくマア辛棒して孝行の真似をして呉れた。モ一これで嫁と姑の仲のよいことは誰れにも分つたであらうから、今夜は約束の通り母を誘ひ出して池の中へ突き落さう」といふと、妻はビツクリして、

「イ、エ何うぞ其のやうに酷いことは止めて下さい、アノ様に柔しいお母さん佛様のやうなお心のお母さんを、自分の至らぬ心から怨んだの

は勿體無うございます。決してくお母さんには何一つ悪い所は無ないのでありますから、ソナナ恐ろしい事は思ひ止つて下さいまし、苟めにも大切のお母さんを殺さうなど、思ふたことを思ふと、ゾツとする程空恐しい心地が致します。それもこれもミンナ妻の至らぬ心から、道のない所へ横に車を押さうとした過ちでありますから、何うぞ許して下さい。」と眞實悔悟の涙に咽んだので、亭主はホツと安心して、
「ア、よく言ふた、よく其處へ氣が付いた。何うか生涯其の心を忘れずに居てくれ、實は若しお前が今夜も矢張り先日のやうに母を殺すことに賛成したなら、母は大切の一人の親故、抜く手も見せずお前を斬つて捨てやうと思ふたのだが、よく改心してくれた。」というて、隠し持つた一刀を示したので、妻は悲しさによくと泣くばかり、暫しは顔を得上げなかつたが、悉く前非を詫びて孝貞無二の良妻となつたこのことで

ある。

傀儡師首にかけたる人形箱

ほとけ出さうと鬼を出さうと。

要するに一心の作用に外ならぬのであるから、

先きの出やうで鬼にも蛇にも

なるよ神にもほとけにも

などいふやうな浅果敢な心を振り捨て、

先きの出やうが鬼でも蛇でも

なるよ神にもほとけにも

といふ誠の心を以てすれば、悪鬼も忽ち善神となり、禍を變じて福を致すことは疑ひのないことである。

法然上人が、或時白河の二階坊で御法談をなされたが、夜もしらぐ

と明けゆく頃、一人の大男が、椽の下からノソノソと這ひ出して上人の前

に両手をつき、ホロ／＼と熱い涙を流して、

「私は耳四郎といふ大賊であります、昨夜も物を取らうと思つて御坊へ

参り人々の寢静まるのを待つて椽の下に潜んで居りましたが、聞くど

しもなく終夜御法談を聞き、あまりの有がたさに涙を流し、つく／＼我

が身の罪の恐ろしさを覺りましたで、懺悔の心止み難く、かくは罷出ま

したのであります。何うぞ私の罪を許し御弟子となして尊きみ法の

教に導いで下さい。」と申出たので、上人は其の宿縁を喜び早くも御承

引なされて、いろ／＼とお説き示しなされたこのことである。

これに類した話は幾らもあるが、これ等の事實に就て考ふるも、十六

悪鬼が大般若の法門を聴聞して、忽ち護法の十六大善神となつたとい

ふのも大いに所以あること、思ひやらるゝではないか。

第五章 十六善神の誓願功德

十六の大惡鬼が佛様の大般若經を説き玉ひしを聽いて甚深微妙の法門に感憤し、從來の惡念邪念をサラりと捨て、人を誑して啖はふの人を困らしてやらうのとの考を露計りも起さぬは勿論大般若守護の爲めに振ひ起ち、大般若經受持の衆生を、何處までも擁護致さうとの大誓願を樹て、其身其まゝ十六大善神となつて、佛様の御手傳をなすとは實に有難いことではないか。「般若大心經」の中に此事が出て居るが、今其本文を擧げて、十六善神が佛様へ申上げた言葉を示すならば、

爾の時に衆中に十六大藥又將有り、(中略)即ち座より起ちて佛足を頂禮して佛に白して言さく世尊、今此の衆中一切の天人既に佛の教を聞き、一切の罪を滅して三途に墮せず、佛種を植う。我等藥

又將も亦復是の如し。既に佛恩を蒙れり、我等佛法僧寶に歸命して常に隨つて擁護すべし。

といひ、又次に、

若し王大臣比丘比丘尼優婆塞優婆夷及び一切衆生此法を受持し若しは讀み若しは誦し若しは聽き若しは念じ、又復佛を念じ、若しは坐禪せん者、我等藥又將及び諸の眷屬其行處に隨つて而かも之れを擁護すべし。

若しは國の城邑、若しは聚落、若しは空閑の林中、是の如き等の處に此般若波羅密多の名を念する者あらば、我等眷屬皆悉く擁護せん、若し人此の般若波羅密多を持せん時、忽ち一切諸の難事に遇はば、我等眷屬共に相擁護せん。若し復人有りて、般若波羅密多成就を得んと欲せば、我等眷屬其願を満たさしめん。

と言ふたのである。別段講釋する程の六ヶしい文句では無いが、ザツト其の意味を言ふならば、即ち爾の時とは言ふまでもなく大般若經説法の時、聽聞の大衆の中に十六藥叉將、即ち夜叉羅刹の大將十六人が各々七千の眷屬と共にあつたが座より起つて佛足を頂禮と最敬禮を爲し、佛様に申上げて言ふやう、世尊よ、今此の會座に列つて聽聞した天上界人間界等の一切の衆生は皆な佛様の教を聞いて凡ての罪障を消滅し、地獄餓鬼畜生等の三惡道に墮ちるやうなことはなく佛となるべき種子を植えて當來成佛の好因縁を結んだが、我等十六藥叉將も亦佛恩を蒙り、是の如く御恩を受けたのである。我等は今より深く佛法僧の三寶に歸依して常平生何時如何なる場所に於ても、必ず三寶に隨ひ力を盡して擁護致しますと堅く誓はれた。而して更らに言葉を繼いで若し國王でも大臣でも、或は男僧でも女僧でも、又は僧侶でなくても佛

法を信する者であるならば、男女の別なく、其他一切衆生誰れでも彼れでも自分の高下や職業の如何等に論なく、苟くも此の法即ち大般若の法門を受持して、或は讀み、或は念じ、又は佛を念ずるとか、坐禪をするとか、佛様の教を信じて、それを行ふ者の爲めには、我等十六人の藥叉將は其の眷屬十一萬二千の者共と俱に共に力を合せて其人の居る處に隨つて擁護いたしませう。若くは一國の都會のやうな賑やかな處でも、さびしい田舎でも、はた又人里離れたヒツソリと靜かに寂しい林の中でも、野の末山の奥何處の果に居る人でも、此の大般若經の名號を念ずる者があるならば、我等藥叉將は必ず皆悉く其の人を護るであらう。又般若波羅密多を持つて居る者が諸の災難に遇ふやうなことがあつても、我等眷屬が擁護して災難を免れさせるであらう。或は大般若の功德を仰ぎ所願成就を希ふ者があるならば、直ちに其靈驗を得せしめ

願ふ處を満足せしむるであらうと誓はれたのである。經中の十六藥
又將とは即ち今の十六大善神様なのである。

十六善神が斯の如きの大誓願を立て、佛様に申上げたので佛様も
大いにお喜びになり、其の決心をお褒めになつて、

善い哉、善い哉、汝等眷屬能く般若波羅密多所在の處に於て而も衛
護を爲す云々。

と仰せられた。スルト十六善神は、

若しは王若しは比丘比丘尼、優婆塞、優婆夷、若し能く深心に我が般
若波羅密多功德自在、威力陀羅尼成就の故を信解せば、又須らく我
等十六眷屬來り佐けて衛護すべし。

で、誰れでも眞實の信心を傾けて、能く大般若の甚深の功德を知り、供養
尊重するならば、必ず十六善神及び眷屬等が其人の處へ來り護るであ

らうといひ、又、

國祚延長、人民安樂にして、四方事無く災禍侵さず、貞幹を保守して
諸の病苦無からん。

といふたのである。これ等は皆な『般若大心經』の中にある言葉である
が、これに依て見ると、別段に十六善神を禮拜供養しないでも大般若を
尊重して、或は讀み又は念すれば、自然に十六善神の加護を受け、大利益
を得ることが出来る譯であるから、大般若は大切だが十六善神は何う
でもよいなど、間違つた考ひを起す者が無とも限らぬが、それは甚だ
宜しく無いことである。成程十六善神の方では大般若護持の衆生を
ば、飽くまで守護して遣らうと大誓願を立てられたのであるから、別に
苦情も言はずに、功德を蒙らしむるは勿論であるけれども、それでは第
一、大般若の心に背くわけである。又たとへ十六善神の思召が左うで

あつても此方からは其れだけの禮義を盡すことは當然である。故に諸君もこの道理を忘れてはならぬ。たゞ大般若を轉讀すれば、十六善神の加護を受けることが出来るのだと、十六善神をソツチ除けにすることは甚だ非禮である。大般若を誦誦し或は轉讀して祈禱するのは取りも直さず十六善神の加護を仰ぐのであるから、大般若を尊重すると共に、十六善神を尊敬供養することを忘れてはならぬ。

それでは十六善神を供養するには、何うすればよいかといふに、『大心經』の中に詳しく説かれてあり、二十一種の供養の具を備ふべきことを示されてあるが、それは餘りに煩はしいから、今は略して置くが、若し二十一種の具を備へることが出来なければ、五種で宜しい、即ち、一には香水、二には雜華、三には燒香、四には飲食、五には燃燈である。これならば別に六ヶしいことはなく、何時如何

なる所に於て誰れにでも出来ることである。即ち香水といふのは、今日腋臭の人がつけて居るイヤな匂ひのするのや、又ハイカラ連中が喜んでつけて居る何々香水などいふ咽せ返へるやうな變な匂ひのするものゝことをいふのではない、清淨な水のことである。雜華とは種々な御華のこと、燒香は香を焚くこと、飲食は即ち御飯、燃燈は御燈明を上げることである。此の五種を以て眞心籠めて供養する、而して其精神は

大慈悲を起して、一切衆生を愍念するが故に、

で、他人は何うでも自分さへよければよいといふやうな我利我利主義では駄目だ。これは敢て十六善神に限つたことは無い、佛教では、

自未得度先度他

というて、自分は未だ度らずとも、先づ他人を度すといふ大慈大悲の心

がなくしてはならぬと戒めてあるが、これが最も大切のことである。世間の諺にも、

情は人の爲めならず、

といふ。他人のことなど何うでもよいといふやうでは、ツマリは自分の身の破滅であるが、十六善神を供養するにも一切衆生を感念するが故に「といふことを忘れてはならぬ。譬へば茲に一軒の足袋屋があつて「何うせ他人が穿く」のだから何んなでもよい、一日で切れて了はふと二日で綻びやうと構はぬ、錢さへ取ればよい」といふやうなことをしたら何うであらう。一度や二度は胡魔化しも効くか知らぬが、終ひには「アノ店の足袋は駄目だ」といふ評判になつて店を閉ぢねばならぬやうな破目に到るであらう。然るに其反對に他人に賣つて錢を頂くのだから、迷惑にならぬやうなのを製へてやらねばならぬ」と叮嚀にしたな

らば、願はずとも繁昌疑ひなしである。されば十六善神に如何なる大誓願があつて、其の功德は如何に廣大であるといつても、此方でそれ丈の心を以て供養し尊敬し、祈願するでなければ、其の功德を蒙ることの出来ぬは勿論である。

心だに誠の道にかなへなば

いのらすととも神や守らん。

祈るともしるしなきこそ験なれ

いのる心にまことなければ

で、天地の法則人間の守るべき道に背きて、たゞ自分の都合のよいことばかりを御祈禱するやうなことでは、何で靈驗利益があらうぞ。古人も、

正法に不思議なし。

と言はれてある如く、正しい教には、少しも不思議奇異のあるべき筈はないのである。神や佛は決して非法邪義に加勢するものではない。若し左ういふ神佛があるとするれば、それはまことの神佛ではない。サンザ人を困らして置いて、自分一人の息災延命無事長久を祈つたり、遊んで居て金儲けが出来ると願つたり、窃盗したのが露見せぬやうにとか、不正な商賣をして家内繁昌するやうになど、御祈禱して、一朝身に不幸を來たす時に於て「ア、世の中には神も佛も在しませぬかな」と、勝手な愚痴をこぼす者が、世間では兎角多いやうであるが、誤れるも亦甚だしい哉、ソナナ無理な注文に靈驗利益の無いのが、まこと神佛のある證據であるのである。人間同志の間には時には嘘偽りの胡魔化しも効くことがあるか知れぬ、神様や佛様の目を眩ますことは出来ぬ。神や佛はたゞ表面丈に體裁のよいことを言うて胡魔化すこ

とは出來ぬ常に我々の心の奥底を見透して御座るのであるから、邪見な心を以て一寸誑してやらうなど、工夫しても、なかく其の手はくはぬ。

或處に夫婦者があつて、女房が妊娠しいよいよ臨月になつて産の床に就いたが、子供が生れさうで容易に生れない。女房は七轉八倒の苦み、側で見て居る亭主も氣が氣でない。そこで亭主は一策を廻らして叶はぬ時の神頼みとは此時だといふので、所の鎮守様を始めとし思ひ出せる丈の神様を皆な呼び上げて、
「女房が今産に向つて苦しんで居りますから、何うぞ早く子供が生れるやうにお願ひ申します。首尾よく安産致しますれば、御禮には金の鳥居を奉納いたします、銀の鈴を買つて納めますから、何うぞ早く安産するやうにお護り下さい」と一生懸命に祈りはじめた。スルトこれを聞い

た女房はビツクリして、

「モシお前さん、ソナナ事を神様へ申上げててもコンナ貧乏世帯で金の鳥居や銀の鈴が何うして出来ますか。妾の爲めに安産を祈つて下さる志は嬉しいが、アトのことが苦勞でなりませんから、何うぞ其のやうなことは止して下さい」といふと、亭主は澄ました顔で、

「ナニ其んな餘計な事は心配しないで、乃公が斯うして神様を誑まして居るうちに、早く子供を産んで仕舞なさい」といふたこの話があるが、コンナ心掛けで御祈禱をしたのでは、しるしなきこそ驗なれである。御祈禱といふのは、自ら身心共に誠を盡して、其の上に神様の御助けを仰ぐので、心に誠を缺き、身の行ひも修めずして、たゞ無闇に種々の願をかければよいといふ譯のものではない、神や佛は決して無理な願ひをお聞き下さるものではないから、十六善神への御祈禱もよく、此の道

理を心得て無理な注文をしてはならぬ。

第六章 釋尊及び四菩薩

十六善神のことは、大略以上に述べた通りであるが、御繪像の中には前にも一寸述べた如く、十六善神以外に、釋迦牟尼佛を始めとして、文殊、普賢、常啼、法涌の四菩薩及び玄奘、三藏、塵沙大王、玄奘の侍者等が書き添へられてある。これは何故であるかといふに、大般若に最も關係の深いお方々であるといふことは、既に御承知であらうが、今少しくこれを述べるならば、中央の釋尊は、説法の印を結んで居らるので、言ふまでもなく、大般若經御説法の様子を示したものである。即ち釋尊は大般若經の教主、十六善神の御本尊である。否、大般若經ばかりではなく、一切の御經は皆これ釋尊の御説きなされたものであるから、佛教信者は

何宗何派を問はず、何人でも釋迦牟尼佛を信仰せねばならぬのである。次に釋尊の下の方に、文殊普賢の二菩薩が御座るが、これは釋尊の兩脇侍で、一は智慧の菩薩、一は慈悲の菩薩である。即ち右の方に獅子に乘つて御座るのが文殊菩薩で、智慧の充滿して居る御様子、左の方に象に乗つてござるのが普賢菩薩で、慈悲の心の溢るゝばかりの御様子である。此の二菩薩に就いては、古來佛敎學者の中に、現實の人であつたとか、イヤ假空の人物で、全く釋尊の慈悲と智慧との二大徳を人格化したものであるとか、随分喧ましい議論があるのだが、今はソナ事は何うでもよい、佛様の悲智圓滿の二徳を示し一切衆生に其二徳をお傳へ下さるのが此の二菩薩で、常に佛様のお傍に侍て御座るお方である。文殊普賢の二菩薩の下に右の方に花を以て御座るのが常啼菩薩で、左の方に掌を合せて御座るのが法涌菩薩である。常啼菩薩のことは

『大般若經』の常啼菩薩品の中に詳しく述べられてあるが、此の菩薩は衆生利益の爲めに非常な難行苦行をなされて、熱心に大般若經を御求めになられたお方である。ソコデ法涌菩薩が深く其の志を察し、自ら善知識となつて、常啼菩薩の苦勞を助け、種々と盡力して、大般若の法門を受けけるやうにしてやられたといふ、何れも大般若の爲めに熱心の菩薩方であるから、其の尊い志の程を現す爲めにこゝへ書き添へて大般若を尊重し、十六善神を供養すると共に此の二菩薩へも報恩謝徳の誠を致すやうにしたのである。

道元禪師は『修證義』の中に、

人身得ること難く、佛法遇ふこと稀れなり。

と仰せられてあるが、實に六道四生の中に於て生を人間に受くることは難中の難譬へば大地の土と爪甲上の土との如く、よくく宿世の善

根に依らなければならぬことである。而してよし幸に人間に生れても佛法に遇ひ奉るといふことは極めて稀れなことで、譬へば盲龜が大いに漂うて浮木に遇ふが如く、實に難値難遇なのである。然るに我々は受け難き人身を受け、座ながらにして遇ひ難き佛法に遇ひ、然かも有難き大般若の受持讀誦も自在にして、十六善神の加護を仰ぐことの出來るといふのは實に此上もない幸福の至りではないか。それに就けても古の菩薩方の御苦勞なされたことを思ひやつて、報恩の誠を致し、尊重恭敬することを忘れてはならぬのである。故に十六善神を供養すると共に常啼法涌の二菩薩を供養するのは、蓋し當然のことである。

第七章 玄奘三藏

常啼法涌二菩薩の下の右の方に笈を背負うて立つて一人の小僧を

從へて居るのが玄奘三藏で左の方に荒々しい顔をして居るのが塵沙大王である。玄奘三藏は『大般若經』を始め多くの經文を翻譯した有名な人で、御經の初めに『大唐三藏法師玄奘奉詔譯』と書いてあるので、少しく御經類を讀んだ者は能く知つて居るであらう。『大般若經』を支那へ傳へたのは即ち玄奘三藏で非常に艱難苦勞をせられたお方である。彼の有名なる『西遊記』には、委しく其の事柄が述べられてあるから、志ある者は一度讀んで見るがよい。兎に角玄奘三藏に依つて大般若が支那に傳はり、それから日本に傳來して、今日我々が座ながらにして有難い法門を見聞し受持することが出来るのであるから、實に大切なお方である。左に其の事蹟の一端を述べて見やう。

玄奘三藏は今から一千三百年程以前の支那唐の時代の人で、若い時から佛門に入つて佛敎を研究されたが、才智は萬人に勝れて、時の太宗

皇帝も玄奘は國の實であると珍重せられた程の人物であつた。所がダンく佛教を研究して見ると、何うも昔から支那に翻譯された御經などに誤りが多く、譯者に依て詞が違ふやうなことがあるので、これは天竺の原語に一致して居らぬではあるまいかとの疑問を起し、是非天竺へ行つて原書を見原語を學んで完全な研究をしなければならぬ。而してまた支那に傳はらぬ大般若經といふのが天竺にあるといふから、それをも是非傳へたいものであるとの志望を抱いて太宗皇帝へ天竺留學を願ひ出した。所が皇帝は容易にお許がない、玄奘三藏は國の實であるから、ウツカリ外國へ遣つて外國の實になつてはならぬ、又萬一途中で獅子や虎に喰はれて了ふやうなことがあつては、大切な實を失ふからといふので、皇帝は深く惜しんで許さなかつたのである。實に當時支那から印度へ行くなどは、決死の精神でなければ出来なかつ

た。交通の不便なるは勿論、多は途中で猛獸惡蛇の餌食となつて、無事に歸つて來るなどは珍らしい程であつたのである。今日印度留學位のことは、實に隣家へでも行く位に何でもないことであるが、千三百年も以前のことであるから、其の困難の一通りで無かつたことは、我が國明治維新前の交通不便であつたことに徴しても明かである。併し玄奘三藏は法の爲めには身命をも惜しまぬ大決心よし途中で倒れればそれまでのこと、是非天竺へ行つて親しく研究したいといふので、遂に夜逃げをして出かけたのである。

併し出立の時には四十人の供を連れ、住馴れた自分の寺の庭にある松の樹に別れを告げ、我は今から佛法研究の爲めに天竺へ行くが、事によつたらお前とは一生の別れとなるやうに計られぬ、若し自分が死んで歸らぬやうなことがあつても、松よお前は千代に八千代に榮へて呉

れよ。この辭を遺して出かけたのである。

我が國にても西行法師は松に思ひをやりて、

此所をまた我すみ憂くてうかれなば

松はひとりにならんとすらん

と詠んだためしあり、又菅原道真公は、左遷に遇うて秘藏の梅に別れを惜み、

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花

あるじなしとて春な忘れそ

と詠まれた。スルト翌年梅が咲くと、其一枝が、道真公の居る筑前太宰府の邊へ飛んで行つた、今尙ほ太宰府の天神境内に飛梅と稱する老梅樹があるといふ。それとこれとは事かはれども、玄井三藏は松に別れを告げ、四十人程の供をつれて出立したが、途中或は風土氣候の變る爲

めに病氣を起して倒れ又は猛獸の爲め喰ひ殺され、河に溺れ山から墜ち、一人死に二人死にして漸く罽賓國といふ所へ行つた頃には、玄井三藏タツタ一人になつて了ふたこのことである。如何に其道中の恐ろしく困難であつたかを思ひやらるゝでは無いか。

罽賓國には一條の大川がある、玄井三藏は其所まで行つて見ると、船もなれば橋も無い、無論徒歩や泳いで渡れるやうな川では無いから、ハタと當惑した。何うして此所を渡つたらよからうかと、思案にくれて居ると、ふと川上の方から屋根を聳く木羽のやうなものが流れて來た、玄井三藏はこれを見て、さては此の川上に人が住んで居ると見えると思ひ、それを便りにズン／＼川上へ遡つて見ると、山の中に一軒の家が在つた。近づいて見ると、夫は破れたお寺で、人間が住んで居さうにも思はれぬ。境内は草の生へるにまかせて、茫々として足を踏み入るゝ

にも薄氣味が悪い位である。併し玄井三藏は折角こゝまで来たのだからと奥の方へ進んで見ると、人間の唸り聲がする、ハテナと思つて其聲を便りに入つて見ると、一人の老僧が病氣で寝て居る、然かもそれは癩病患者で二目とは見られぬやうな淺ましい様子で、臭氣は紛々として鼻を衝く。玄井三藏は聊かの躊躇もなく進み寄つて、

「私は支那の玄井といふ者此度求法の爲めに天竺へ行かふと思つて来たのであるが、貴僧は御病氣で御難澁の御様子、お一人ではさぞ御不自由でありませう、誰れか看病する者は無いのでありますか。」と尋ねると、老僧は、

「ア、親切によくぞ尋ねて下された。ナニ初めは二三人も居て看病して呉れたが、何分私の病氣が病氣故、皆嫌うて去つて了ふた、今ではモ一起き臥しも自由に出来ぬ程病氣は重く、斯うして一人で死ぬのを待

つより外は無いのである。」といふたので、玄井三藏はこれを聞いて氣の毒に思ひ、

「それでは私が此に足を留めて看病致しませう。」といつて、一心に看病したので、さしもの大病人も遂に全快したといふ。こゝらが普通の人には眞似も出来ない處である。人情として「さぞお困りでせう、お大事になさい。」位のことはいふ者はあらうが、看病を頼まれても「イヤ私には先きを急ぐ旅の者ですから。」と逃げ口上をいふが普通の人情であらう。然るに玄井三藏は自分は今大望を抱いて天竺へ行く身であるが、此所で此老僧に遇ふたのも深い因縁であるから、これを見捨て行く譯にはならぬ、それは人情でないばかりでなく、佛法を信じ慈悲を旨とする僧の爲すべきことでは無いと考へて、わざ／＼足を留めて看病につくしたのである。老僧は病氣が全快したので非常に喜び、厚く禮を

述べて、

「私は迎も助かる見込みの無い業病を、貴僧のお蔭で助けて貰ふたのは實に有難い。就てはお禮のしるしに秘藏のお經文を授けませう。」と
 いうて、一巻の經文を天竺の原語のまゝで授けた。玄奘三藏は、まだ天竺へ入らぬうちに早くも天竺の原語の經文を授かるとは最先きよしと喜んで、直ちに其處を出立し、朝夕熱心に其經文を唱へて旅をつけた。所が不思議なことには、それから後、更に災難に遇はなかつたといふ。其經文は即ち「般若心經」とて大般若の精粹を抄いて書いたお經であつた、これを神僧傳授の梵本といふのである。神僧といふのは何故かといふに、玄奘三藏は、此老僧からお經を授つてから、いろ／＼の災難を免れ、首尾よく天竺に入つて目的を達することが出来たので、天竺からの歸りに再び其寺を尋ねた所が、以前の老僧が居ないばかりでな

く、寺までも何うしたのか跡方もなく何うしても分らぬので、これは或は羅漢様のやうなお方が、假りに病僧の姿を現じて自分の精神に訓練を與へ「願望成就」を御守護の爲めに此の般若心經をお授け下されたのであらうといふので神僧といふたのであるとのこと。

さて玄奘三藏が「般若心經」のお蔭で災難を免れたことを一つ話して見るならば、玄奘三藏が天竺に入つて、洹河の邊りへ差かゝた時、其所には多くの土人がガヤガヤ騒いで居たが、玄奘三藏の姿を見るや、何やら饒舌ながら嬉しさに急に玄奘三藏の側へ飛んで來たが、突然大勢で玄奘三藏の手取り足取りして河邊へ連れ行き、大地へ仰向けに臥かしたのである。玄奘三藏は何時コンナ亂暴なことをするのか、一向合點が行かず、知らぬ他國でたゞ一人、相手は大勢の野蠻人であるから、今更何うすることも出来ず、彼等のするがまゝに任せて居たが、幸ひ以前

老僧から經文を授かる時に少し覺るた天竺の言葉で、片言交りに其の理由を聞いて見ると驚いた。天竺では婆羅門教が盛んなのであるが、其の宗教の或派の悪習として毎年一人づつ生命を犠牲として、洹河の神様へ供物としてお祭りをせねばならぬといふ野蠻な習風があつたのである。所が今日も今日とて丁度其の祭日乃で村の某といふのを殺して血を以て神様を祭らねばならぬといふで、親類縁者の者共が寄り集つて歎き悲しんで居る所へ、玄奘三藏が通りかゝつたものであるから、これ幸ひと氣の毒ではあるが、村の者を殺すより、イツン知らぬ他國の此法師を殺して神様へ供へやうと相談したので、決して悪意でするのではないから、厭やでもあらうが、一命を呉れてくれとのこと。玄奘三藏は、これは飛んでも無い災難に遇ふたと思ふたが、何とも致し方が無いから、これも因縁と諦らめ、運命を天に任せて、

「左ういふことであるなれば何うも致し方が無いからお前達の望み通りに殺されやう、併し私は支那の僧侶であるが、末期のお經を讀んで死にたいから、其間丈け待つて呉れ。」というて老僧から授かつた經文即ち『般若心經』を三遍讀んだのである。スルトお經の靈驗か、偶然の出来か、今や三遍目を中程まで讀むと、一天俄かにかき曇り、ゴーツと物凄いな音がすると思ふ間に、忽ち大風が吹き起つて、砂を巻き石を飛ばすといふ物凄いな光景になつたので、もとより迷信の深い土人共は、これは大變だ、此人が何か讀み出すとコンナに天が暴れ出したのだから、これはキツト偉い人に相違ない、斯ういふ人を殺したら、ドンナ恐ろしい神様の祟りを受けるも知れぬといふので、早々玄奘三藏の繩を解いて、深く其罪を謝し、決して悪意では無いから、何うぞお許し下さいといふたので、玄奘三藏もホツト安心したといふ。

斯ういふ苦心を経幾多の危害困難に遇うて、漸く目的地に達し、王舎城といふ都に到り、戒賢論師といふお方に就て佛教の奥義を學び、多くの梵語即ち天竺の原語のお經六百五十部を持つて歸國し、専ら翻譯に従事せられたのである。玄奘三藏が志を起して支那を出立したのは唐の太宗貞觀三年で、天竺に着いたのは其七年であつたといふから、五年目に漸く天竺へ着いた譯である。而して十九年に歸國したのであるが歸國すると直ぐに宮中からの詔を受けて、弘福寺に於て、南山道宣律師など、共に翻譯に従事せられ、譯する所の經論七十四部、一千三百三十八卷の多きに達したといふ。

玄奘三藏は智慧が非常に勝れて居たので、皇帝が其才を惜しんで、これだけの人物を法師にして置くのは惜しいからといふので、何うか還俗して、政治の相談相手になつて呉れまいかと御相談せられたが、玄奘

三藏は固く辭退したので、それでは無理に還俗せんでもよいから、時折相談相手になつて呉れと言うて、紫微殿の西北の方に弘法院といふお寺を建て、住はせることにしたので、それをも辭することは出来ないで、晝は皇帝のお側に出で、政治や佛教のお話を爲し、夜は寺に歸つてお經を翻譯したと言ひ傳へられてある。以て玄奘三藏が如何なる人物であつたかを察せらるゝではないか。

大般若經は無論玄奘三藏が印度から携へて來た經文の中にあるのであるが、唐の高宗皇帝の詔を受けて、當時の有名なる儒官約二百人を助手として、翻譯に従事し、滿四年にして成功し、龍朔三年十月嘉壽殿に於て大供養を行ふたが、時に經卷より大光明を放ちて、遠近を照らし、天華亂墜等の奇瑞があつたと傳へられてある。

かくて玄奘三藏は高宗皇帝の麟德元年に六十三才を以て入滅せら

れたが、皇帝はこれを悼みて、廢朝三日に及び、朕は國の寶を失ふた」と歎かせ玉ひ、五たびも勅書を下して葬儀のことを達せられ、葬儀の當日には會葬者實に百萬餘人もあつたこのことである。

されば大般若經が支那に傳はつたのは、全く玄奘三藏の盡力に因る所で、それが日本にまでも傳はつて、今日我々が容易に此の有難い法門を見聞をすることが出来るといふのは、即ち玄奘三藏の盡力があつたればこそであるから、大般若を拜見する時には、何を措いても先ず玄奘三藏の徳を讚歎恭敬し、其の廣大の恩に報ゆるの誠をいたすことを忘れてはならぬのである。

第八章 塵沙大王

塵沙大王は支那から天竺へ行くには是非通らねばならぬ一つの大

きな川がある、流沙河というて、實に天竺へ行くの大難場である。其の河を守つて居る神様で、其の眷屬は實に無量無數塵や沙の如く澤山であるといふので、塵沙大王といふのであると『因緣集』に出て居る。或は神蛇大王、神蛇神王ともいふてあるが、此の神様は、玄奘三藏が天竺から大般若を持つて歸る時、河の邊りに現はれて、

「自分は今日まで六生の間、生れ變り死にかはり、貴僧が天竺から經文を支那へ持つて往かれるのが口惜しくて、其の度毎に此所で取り殺してこれ此の通り貴僧の骸骨を六つ自分の頸にかけてあるのだが、六返まで取り殺されても、まだ擔ます、第七返目に生れて來て、又もや貴い經文を天竺に求めて歸られるとは、實に感服の至り、今はモ一取り殺すどころか、これ程熱心の貴僧に幾度か危害を加へた罪禍の程が恐ろしく、お耻かしい氣持が致します。何うかこれまでの罪を許し、怨みを捨て、